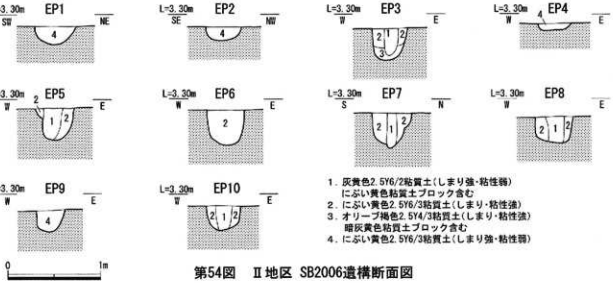
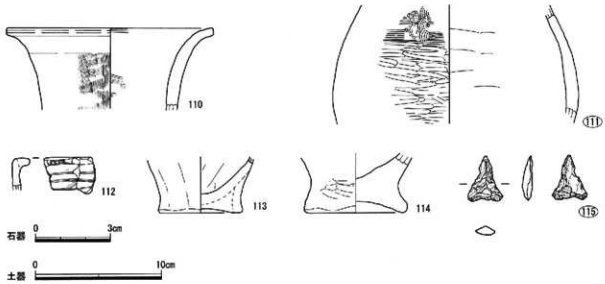


第54図　Ⅱ地区 SB2006遺構断面図



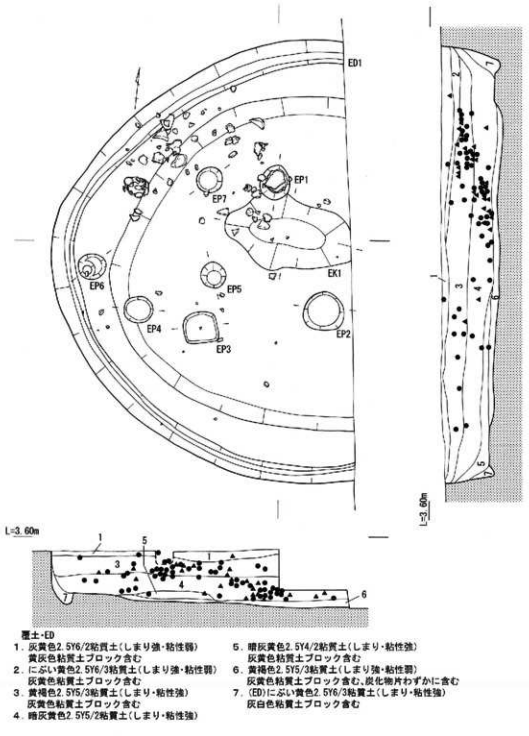
第55図　Ⅱ地区 SB2006遺物実測図

からEP1～3・5・7のいずれかが主柱穴となる可能性がある。

遺物は弥生土器片・壺・甕，瓦器椀，サヌカイト製石鏃・石庖丁，砂岩製叩石・磨石・石錘，泥岩礫（加工か），被熱礫（砂岩・片岩）が出土しているが，中世遺物は混入である。

116は広口壺と考えられる。体部外面は斜位・縦位のハケを施し，凸帯を2条平行して貼り付け，斜位の刻目を加える。胎土にチャート・砂岩・泥岩を含む。117は広口壺。外面は頸部～体部全面にハケ目調整を施し，頸部下半部と体部中位に横位の多条沈線を引く。胎土にチャートを含む。118は甕で，口縁端部に刻目を加える。体部外面にタテハケを施す。胎土に結晶片岩・砂岩を含む。119～121は紀伊型の甕。120は体部外面に横位の粗いヘラケズリを加え，頸部との境ににぶい稜を残す。121は外面の頸部～体部上位にハケ目調整とヘラミガキを施し，以下は縦位のヘラケズリを加える。ともに胎土は粗く，結晶片岩と金雲母を含む。122は壺の底部で，体部外面にハケ目とヘラミガキ調整を施す。123は甕の底部で，体部外面は密なタテハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。

124は研磨したような平坦面を残す泥岩質の自然礫。125は砂岩製の石錘とみられ，表裏両面に長軸



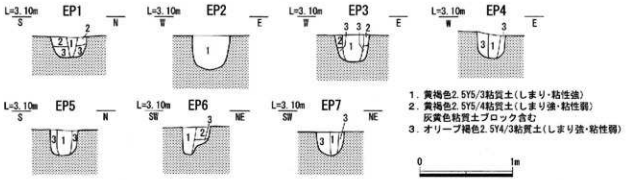
覆土-ED

1．灰黄色2.5Y6/2粘質土(しまり強・粘性弱)
　灰黄色粘質土ブロック含む
2．にぶい黄色2.5Y6/3粘質土(しまり強・粘性弱)
　灰黄色粘質土ブロック含む
3．黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり・粘性強)
　灰黄色粘質土ブロック含む
4．暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)
5．暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
　灰黄色粘質土ブロック含む
6．黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり強・粘性弱)
　灰黄色粘質土ブロック含む、炭化物片わずかに含む
7．(ED)にぶい黄色2.5Y6/3粘質土(しまり・粘性強)
　灰白色粘質土ブロック含む

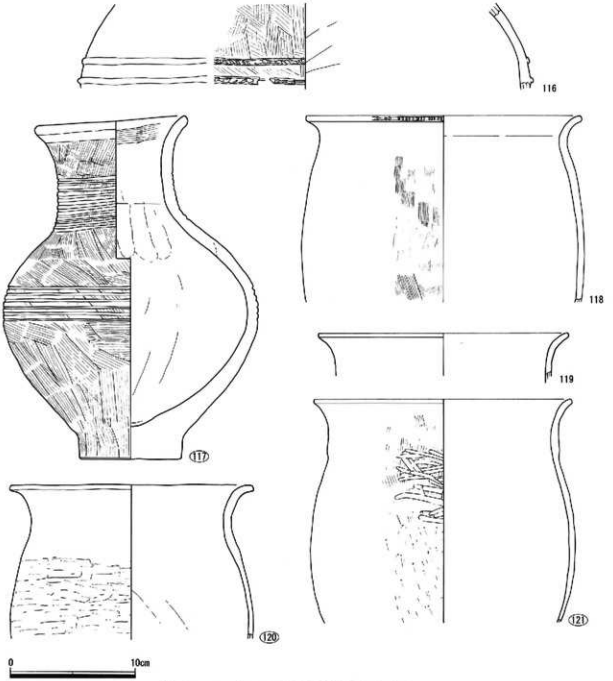
EK1

1．黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり・粘性強)
　灰黄色粘質土ブロック含む、炭化物片わずかに含む

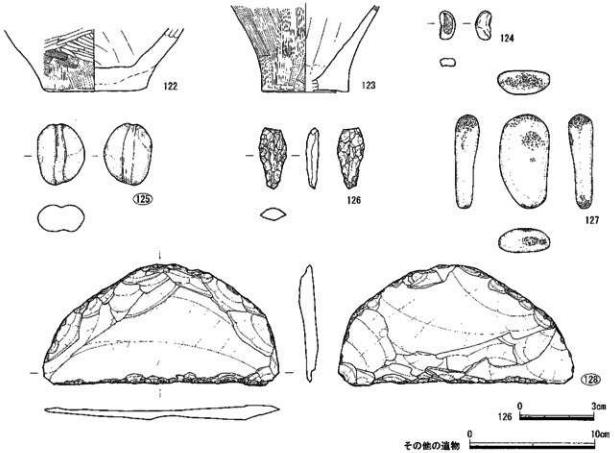
第56図　Ⅱ地区 SB2007遺構実測図



第57図　Ⅱ地区 SB2007遺構断面図



第58図　Ⅱ地区 SB2007遺物実測図（1）



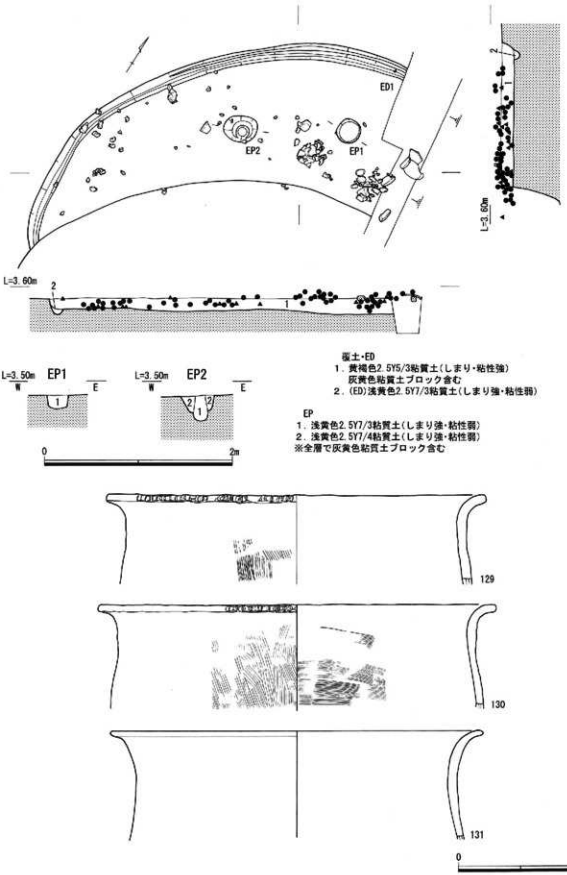
第59図　Ⅱ地区 SB2007遺物実測図（２）

方向の溝を作る。126はサヌカイト製の凸基式打製石鏃。127は砂岩製の叩石。扁平な長楕円形の自然礫を用いる。両端と平坦面に敲打痕が集中する。128はサヌカイト製の打製石包丁。大形の横長剥片を素材に使用し，両面から細かい調整を加え直線的な刃部を作り出す。

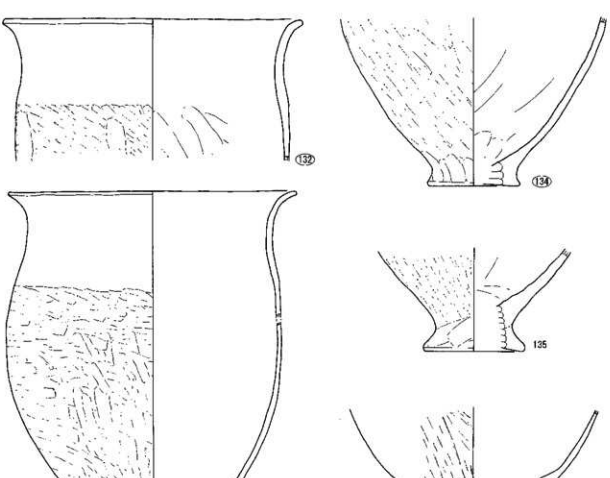
竪穴住居８号（Ⅱ地区　SB2008）（第60・61図）

Ⅱ－４区北東端，ｉ・ｊ６・７グリッドに位置し，南側をSB2007に切られ，東は調査区外に延びる。東西検出長366cm 南北残存長152cm 深度14cmを測る円形の竪穴住居。断面は逆台形状で，埋土は１層，底面は概ね平坦である。周壁溝ED１は残存部で全周し，幅12cm 深度６cmを測る。断面は浅いU字状で，埋土は１層。EPは２基検出し，径26～36cm 深度14～26cmを測る。EP２で柱痕とみられる土層を確認。

遺物は弥生土器片・壺・甕，土師質土器片，瓦器椀，サヌカイト片，砂岩製叩石，被熱砂岩・結晶片岩礫が出土しているが，中世遺物は混入。129・130は甕で，強く外反する短い口縁をもつ。口縁端部にヘラ先による縦位の刻目を加え，体部外面にタテハケを施す。130は内面にヨコハケを残す。ともに胎土に結晶片岩を含む。131～136は紀伊型の甕。132・133は体部外面に左上がりの粗いヘラケズリを加え，頸部体部の境ににぶい稜を残す。131は摩耗により調整痕が不明瞭だが，同様の形状と考えられる。133～135は外面の底体部境に強い括れをもつ。136は底径が大きく，体部との境に括れをもたない。概して胎土は粗く，131を除いて結晶片岩を含む。132・134は金雲母と絹雲母を，133には泥岩を含む。



第60図　Ⅱ地区 SB2008遺構・遺物実測図（１）



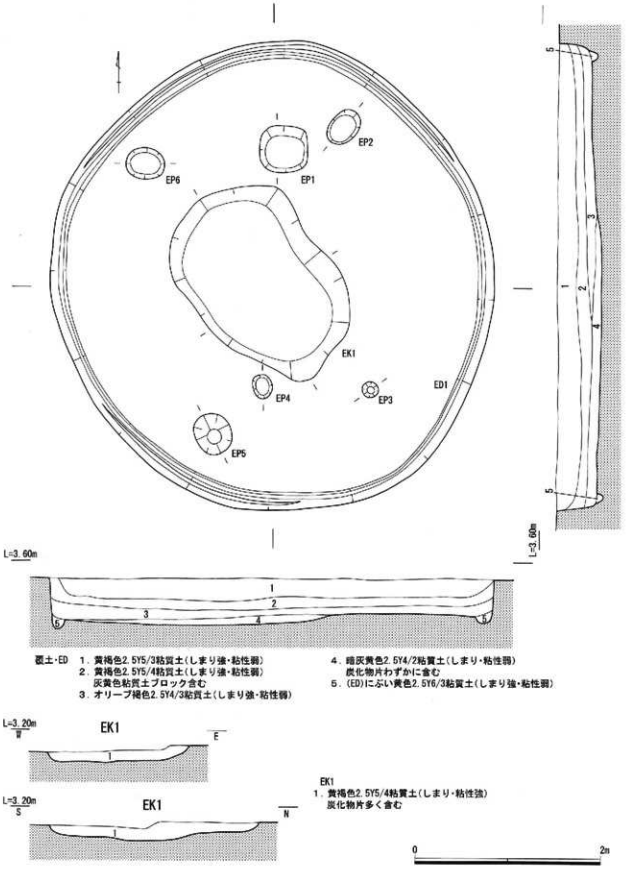
第61図　Ⅱ地区 SB2008遺物実測図（２）

竪穴住居９号（Ⅱ地区　SB2009）（第62～64図）

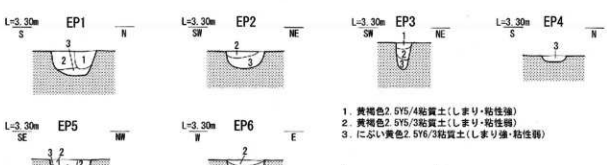
Ⅱ－５区中央部南側，ｈ・ｉ１・２グリッドに位置する。南北496cm 東西472cm 深度48cm を測る円形の竪穴住居。断面は逆台形状で，埋土は４層，底面は概ね平坦であるが南西側がわずかに下がる。

周壁溝ED１は全周し，幅18cm 深度15cm を測る。断面はU字状で，埋土は１層である。EK１は住居中央部に位置し，長軸224cm 短軸148cm 深度20cm を測る不整形土坑。断面は皿状で，埋土は１層である。炭化物片を含むため，炉跡の可能性がある。EPは６基検出し，径16～50cm 深度６～28cm を測る。EP５では柱痕とみられる土層が確認できる。配置が不規則で規模も不揃いであるが，EP２・３・５・６が主柱穴となる可能性がある。

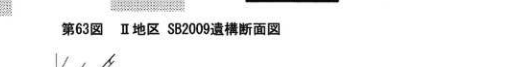
遺物は弥生土器片・甕，須恵器片，土師質土器椀・杯，須恵質土器片，砂岩製叩石が出土しているが，古代・中世遺物は混入である。137は平底の甕。底部は厚く，体部外面にタテハケを施す。胎土に結晶片岩・泥岩とみられる粒子を含む。138は紀伊型甕の底部。体部外面に縦位の粗いヘラケズリを加える。底体部との境に強い括れをもつ。底部には焼成後穿孔を施す。胎土は粗い。



第62図　Ⅱ地区 SB2009遺構実測図



第63図　Ⅱ地区 SB2009遺構断面図



第64図　Ⅱ地区 SB2009遺物実測図

竪穴住居10号（Ⅱ地区　SB2010）(第65・66図)

Ⅱ－５区東部中央，ｉ～ｋ３・４グリッドに位置する。南北628cm 東西614cm 深度26cm を測る円形の竪穴住居。断面は逆台形状で，埋土は１層，底面は平坦。EH１は住居中央部に位置し，長軸168cm 短軸122cm 深度42cm を測る。断面は不整な逆台形状で，多段状の壁面をもつ。埋土は３層で第１・２層に炭化物片を多く含む。EPは11基検出したが，配置はやや不規則。径16～32cm 深度６～46cm を測る。

遺物は弥生土器片・甕・鉢，瓦器椀，サヌカイト片・石錐，緑色岩製石斧，砂岩製叩石・砥石が出土しているが，中世遺物は混入である。

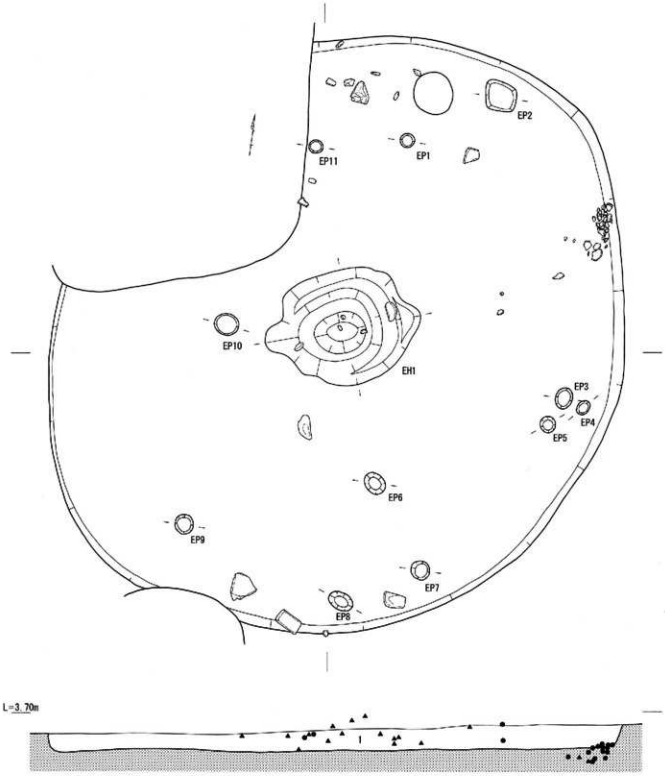
139は甕。口縁端部にヘラ先による縦位の刻目を加える。外面の口縁～体部上半にタテハケ，下半に縦位のヘラミガキを施す。底部と体部の境は外方に突出し，括れを作る。内面は口縁にヨコハケ，体部に縦位の板ナデと疎らなヘラミガキを施す。胎土に結晶片岩を含む。140は甕の上半部。

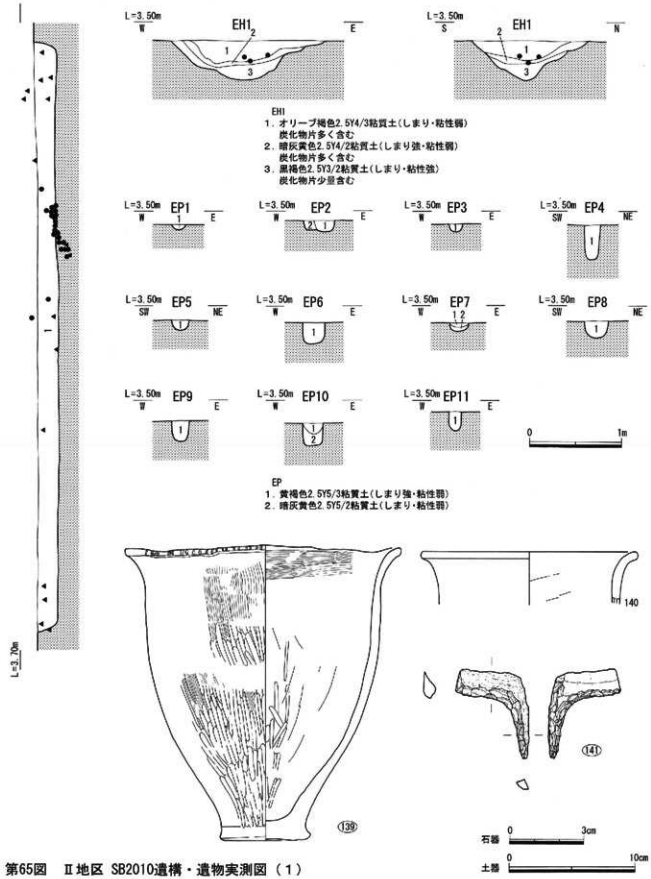
141はサヌカイト製の打製石鏃。背面に自然面を残し，両面から調整を加え錐部を作り出す。142は緑色岩製の磨製石斧。幅広で長さが短い寸づまりの形態を持つ。刃部は直線的でよく研磨するが，頭部や身部には成形時の剥離痕や敲打痕を多く残す。143は砂岩製の叩石。扁平な楕円形の自然礫を使用し，側縁部に細かな敲打痕を残す。144・145は砂岩の自然礫を使った砥石。144は片面，145は両面を砥面として使用。144は不整楕円形の自然礫をそのまま使用するが，145は大型の礫を分割する。

竪穴住居11号（Ⅱ地区　SB2011）(第67～70図)

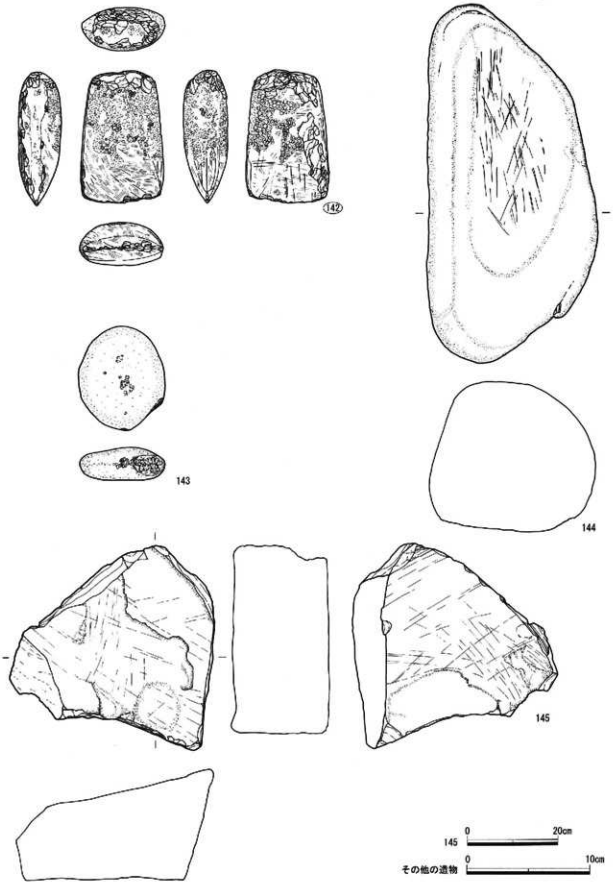
Ⅱ－７区西部，ｌ・ｍ９・10グリッドに位置し，中央部を上層の遺構により東西に撹乱を受ける。南北416cm 東西386cm 深度16cm を測る不整円形の竪穴住居。断面は逆台形状で，埋土は３層，底面は概ね平坦である。EH１は，住居西側に位置し，北側を撹乱により切られる。長軸残存長112cm 短軸90cm 深度22cm を測る，不整形の炉跡である。断面は皿状で，埋土は３層である。EPは確認できない。

遺物は弥生土器片・壺・甕・鉢，須恵器杯，サヌカイト片，結晶片岩製石斧，砂岩製叩石・砥石・台

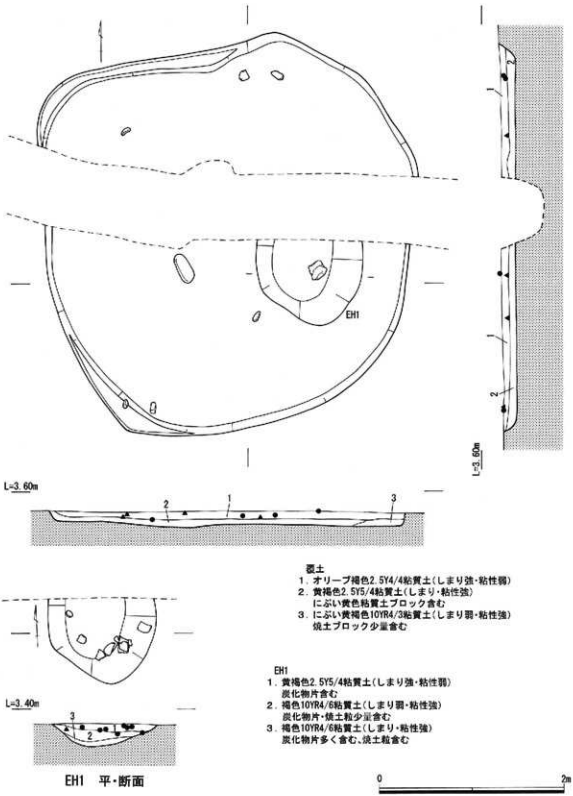

EP2
EP1
EP11
EP10
EH1
EP3
EP4
EP5
EP6
EP9
EP7
EP8
L=3.70m
1
0
2m
遺構
覆土
1．オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり強・粘性弱)
炭化物片わずかに含む



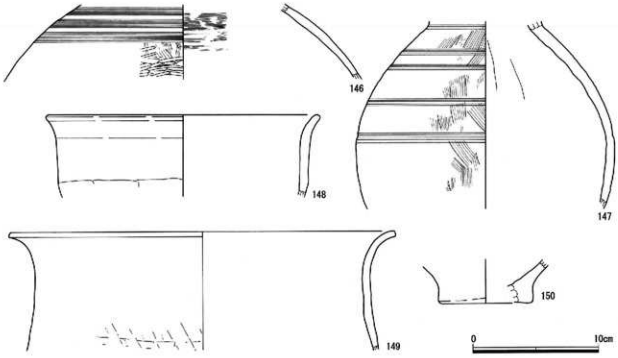
第65図　Ⅱ地区 SB2010遺構・遺物実測図（１）



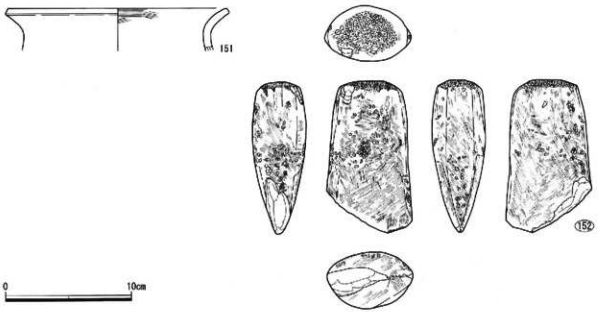
第66図　Ⅱ地区 SB2010遺物実測図（２）



第67図　Ⅱ地区 SB2011遺構実測図



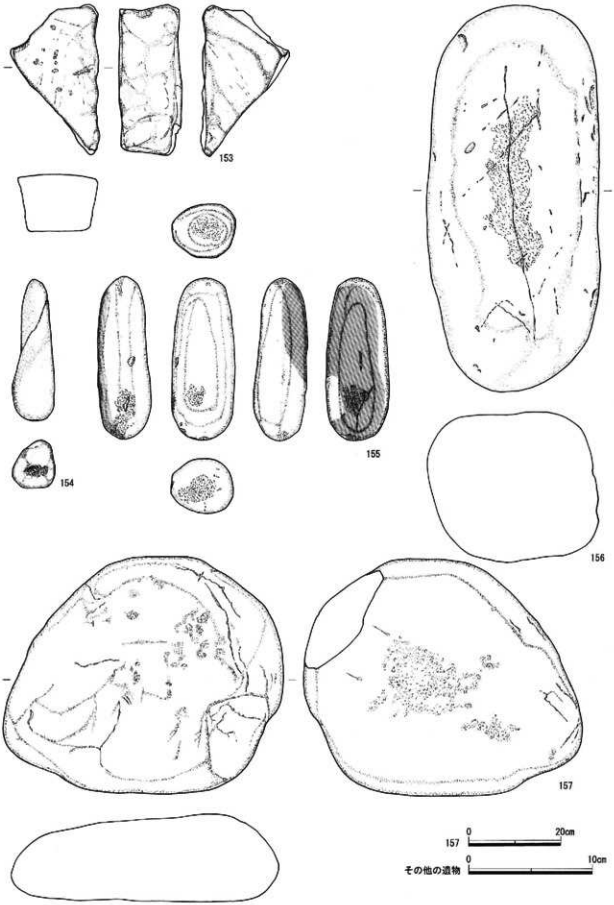
第68図　Ⅱ地区 SB2011 EH1 遺物実測図



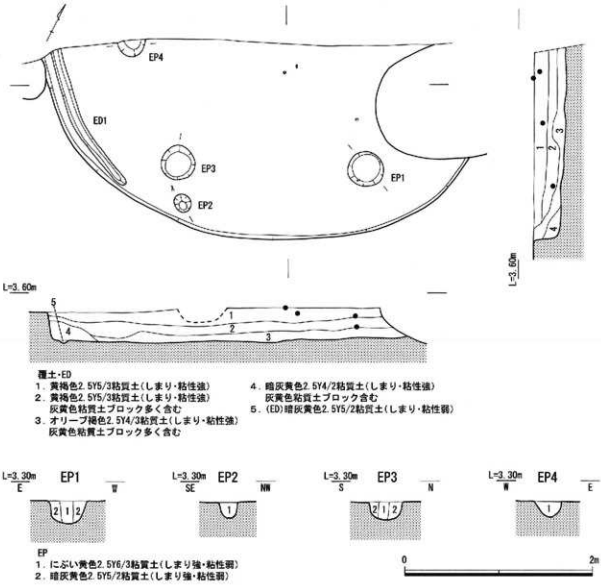
第69図　Ⅱ地区 SB2011覆土 遺物実測図（1）

石，被熱砂岩礫，炭化物片が出土しているが，古代遺物は混入。

146は広口壺と考えられる。体部上位にはハケ目調整の上から横位の櫛描直線文をわずかな間隔をあけて施文。内面にはヨコハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。147は壺で，体部上半に間隔が広く不規則な櫛描直線文を施す。胎土に結晶片岩を含む。148は鉢または深鉢と考えられる土器。体部外面に横位のヘラケズリを施す。胎土に結晶片岩・泥岩を含む。149は紀伊型の甕。体部外面に左上がりのヘラ



第70図　Ⅱ地区 SB2011覆土 遺物実測図（2）



第71図　Ⅱ地区 SX2001遺構実測図

ケズリを加える。胎土に結晶片岩と金雲母を含む。150は甕の底部。胎土に結晶片岩を含む。151は甕。口縁端部を平坦に仕上げ，内面にはヨコハケを施す。胎土に結晶片岩・金雲母・絹雲母を含む。

152は結晶片岩製の磨製石斧。幅広で身部が短い寸詰まりの形態をもつ。断面は楕円形で，刃部がわずかに撥形に開く。全体を研磨するが，整形時の敲打痕を多く残す。153は砂岩製の砥石。表裏両面を砥面として使用し，砥面の一部に細かな敲打痕が集中する。全体が被熱し，一部赤変。154・155は棒状の自然礫を使用した叩石。154は一方の端部に細かな敲打痕が集中する。155は両端と表面に敲打痕を残す。156・157は砂岩製の台石。156は表面，157は表裏両面に敲打痕を残す。

不明遺構１号（Ⅱ地区　SX2001）（第71図）

Ⅱ－４区西部北端，g・h20・1グリッドに位置し，北半は調査区外に延びるが，隣接するⅡ－５区では検出されない。東西残存長464cm 南北検出長208cm 深度36cm を測る，円形の竪穴住居状遺構。断面

は逆台形状で，埋土は４層，底面はわずかに起伏がある。住居の可能性が高いが，炉跡を欠くため竪穴住居状遺構とした。周壁溝ED１は，住居西側に位置し，北側は調査区外に延びる。残存長162cm 幅12cm 深度４cm を測る。断面は浅いU字状で，埋土は１層である。EPは４基検出し，径20～38cm 深度16～24cm を測る。EP１・３で柱痕とみられる土層が確認できる。遺物は弥生土器片・甕が出土。

不明遺構２号（Ⅱ地区　SX2002）（第72図）

Ⅱ－４区中央部北端～Ⅱ－５区中央部南端，h・ｉ２グリッドに位置し，中央部を東西に側溝が切る。東西302cm 南北304cm 深度24cm を測る円形の竪穴住居状遺構。断面は逆台形状で，埋土は４層，底面は概ね平坦である。炉跡は確認できない。EPは南半部で３基検出し，径30～42cm 深度12～26cm を測る。EP１・３で柱痕とみられる土層が確認できる。北半部では柱穴が確認できない。

遺物は弥生土器片・壺・甕，炭化物片が出土。158は甕の体部上位とみられる。ハケ調整のち横位のヘラ描き平行沈線を６条施文。胎土は粗くチャートを含む。159は壺の底部。体部外面には磨耗により不明瞭ながらヘラミガキの痕跡がみられる。胎土は粗くチャートを含む。

不明遺構３号（Ⅱ地区　SX2003）（第73・74図）

Ⅱ－４区中央部，g・h３・４グリッドに位置し，西側をSB2002・2004が切る。南北長514cm 東西残存長476cm 深度22cm を測る円形の竪穴住居状遺構。断面は逆台形状で，埋土は２層，底面は平坦である。炉跡は確認できない。ED１は住居南端部に位置し，全長192cm 幅13cm 深度５cm を測る。断面は浅いU字状で，埋土は１層。EPは２基検出し，径30～32cm 深度16～18cm で，柱痕とみられる土層を確認。

遺物は弥生土器片・甕，土師質土器杯，砂岩製叩石が出土。160は広口壺。頸部外面に櫛描直線文をほぼ等間隔で施文する。胎土に結晶片岩を多く含む。161は甕で，口縁端部を欠くものの逆L字形の口縁をもつと考えられる。体部外面にタテハケを施す。胎土にチャートとみられる粒子を含む。162・163は紀伊型の甕。緩く括れる比較的長い頸部をもつ。162は口縁部に横ナデを加えて端部を丸く仕上げ，頸部には丁寧なナデ調整を施す。胎土は概して粗く，結晶片岩と金雲母を含む。

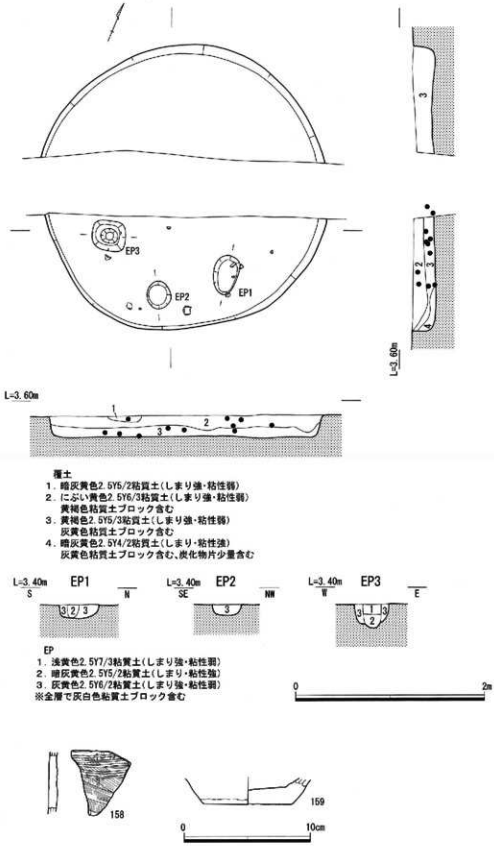
164は砂岩製叩石で，両端には細かな敲打痕が集中する。

不明遺構４号（Ⅱ地区　SX2004）（第75図）

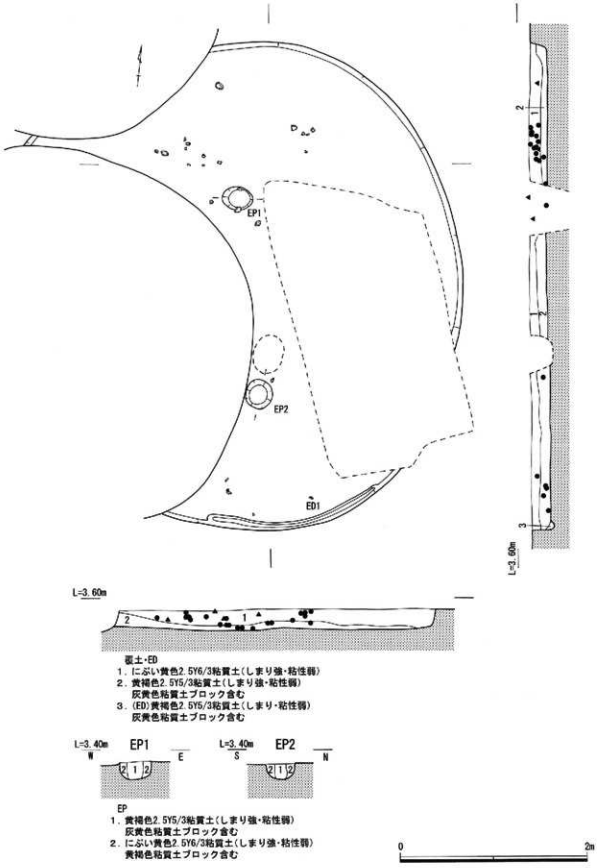
Ⅱ－４区東部北側，ｉ・ｊ５グリッドに位置し，東半はSB1005・1006に切られる。東西残存長230cm 南北長328cm 深度28cm を測る円形の竪穴住居状遺構。断面は逆台形状で，埋土は４層，底面は概ね平坦である。遺物は弥生土器片・甕，鉄製品片，被熱砂岩礫が出土しているが，いずれも小片のため実測し得なかった。

不明遺構５号（Ⅱ地区　SX2005）（第76図）

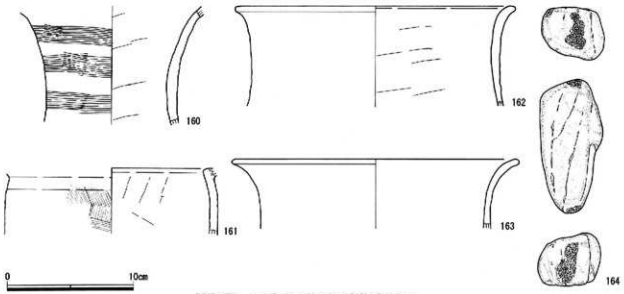
Ⅱ－５区西部中央，ｉ20・１グリッドに位置する。長軸378cm 短軸238cm 深度36cm を測る不整な隅丸長方形を呈する不明遺構。断面は逆台形状で，埋土は２層，底面は概ね平坦である。遺物は弥生土器片・甕が出土。165は甕。口縁端部に粘土帯を貼り付け逆L字形に仕上げる。体部外面は斜位のハケ，内面は指頭によるナデを加える。小片かつ磨耗のため口縁端部の刻目は確認できない。



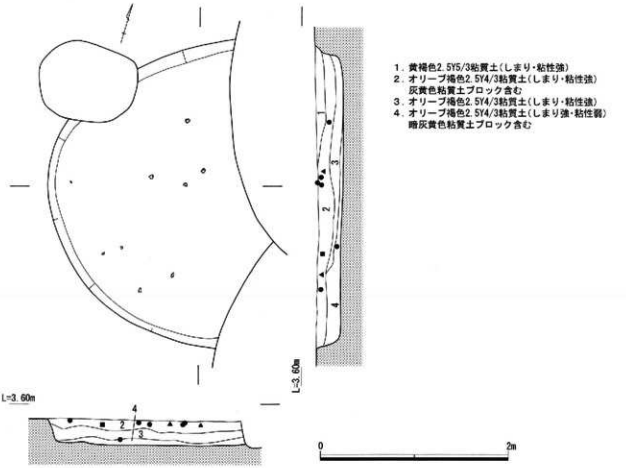
第72図　Ⅱ地区 SX2002遺構・遺物実測図



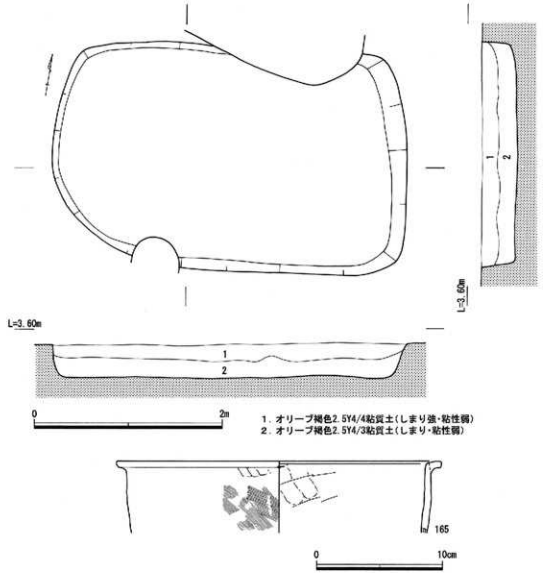
第73図　Ⅱ地区 SX2003遺構実測図



第74図　Ⅱ地区 SX2003遺物実測図



第75図　Ⅱ地区 SX2004遺構実測図



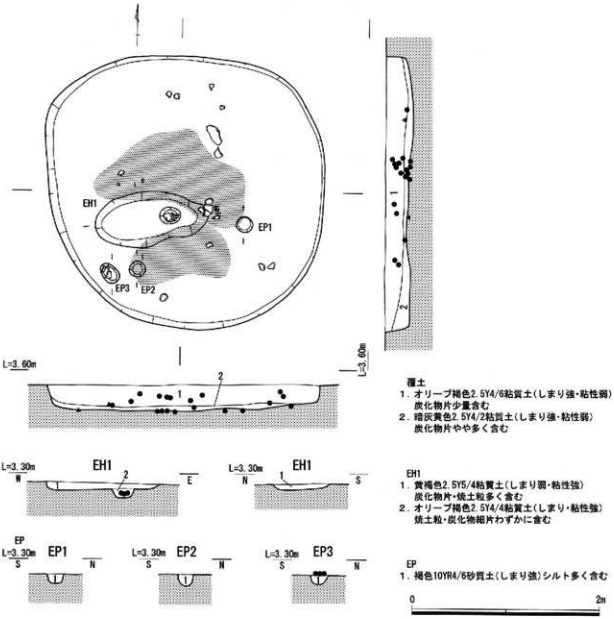
第76図　Ⅱ地区 SX2005遺構・遺物実測図

不明遺構６号（Ⅱ地区　SX2006）（第77・78図）

Ⅱ－５区中央部，ｉ・ｊ２グリッドに位置する。東西長324cm 南北長300cm 深度28cm を測る不整円形の竪穴住居状遺構。断面は逆台形状で，底面は概ね平坦である。埋土は２層で，第２層に炭化物片を多く含む。図の網掛け部は炭化物片の範囲を示す。

EH１は遺構南西側に位置する。長軸120cm 短軸58cm 深度16cm を測り，不整形な平面をもつ。断面は浅い逆台形状で，東側に浅いピット状の落ち込みがある。埋土は２層で，第１層に炭化物片を多く含む。EPは遺構南側で３基検出し，径16～24cm 深度10～12cm を測る。配置に規則性はみられない。

遺物は弥生土器片・壺・甕，瓦器椀，サヌカイト片，砂岩製叩石が出土しているが，中世遺物は混入。166・167は広口壺。166は口縁端部に刻目を加える。頸部内外面にはハケ調整を施す。ともに胎土に結晶片岩を含む。168は甕。口縁端部に刻目を加え，外面は斜位のハケ，内面はヨコハケとヘラミガキ調整を施す。胎土にチャートを含む。169は壺，170・171は甕の底部。169・170は体部外面にタテハケを施し，171は内外面とも器面調整にハケとヘラミガキを併用する。ともに胎土に結晶片岩を含む。



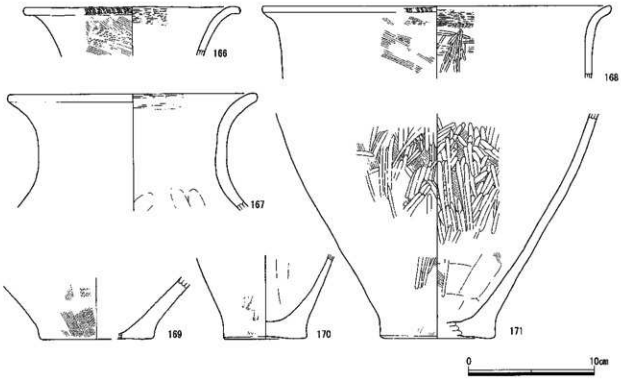
第77図　Ⅱ地区 SX2006遺構実測図

不明遺構８号（Ⅱ地区　SX2008）(第79図)

Ⅱ－５区中央部北側，ｊ１・２グリッドに位置する。長軸610cm 短軸280cm 深度26cm を測る不整な隅丸長方形を呈する不明遺構。断面は緩い不整な逆台形状で，埋土は２層，底面は概ね平坦である。EPは遺構西端部で３基検出し，径26～36cm 深度18～38cm を測る。遺物は弥生土器片・壺，瓦片，サヌカイト製楔形石器が出土しているが，瓦片は混入である。172は壺の底部。器壁は２cm と厚く，外面にはハケ調整を加える。胎土に砂岩・泥岩およびチャートとみられる粒子を含む。

不明遺構10号（Ⅱ地区　SX2010）(第80図)

Ⅱ－５区東部北端，ｋ３・４グリッドに位置し，北側は調査区外に延びる。東西残存長450cm 南北検出長258cm 深度26cm を測る不整形を呈する不明遺構。断面は逆台形状で，埋土は２層，底面は概ね平坦である。遺構内遺構は確認できない。



第78図　Ⅱ地区 SX2006遺物実測図

遺物は弥生土器片・甕，須恵器杯，土師質土器片，瓦片，サヌカイト製石錐，結晶片岩製叩石が出土しているが，古代・中世遺物は混入である。173は紀伊型甕の底部。体部外面に縦位の粗いヘラケズリを加える。上げ底で，体底部の境が外方に大きく突出する。胎土は粗い。174はサヌカイト製の打製石錐。背面の一部に自然面を残す。調整は腹面側だけに行う。

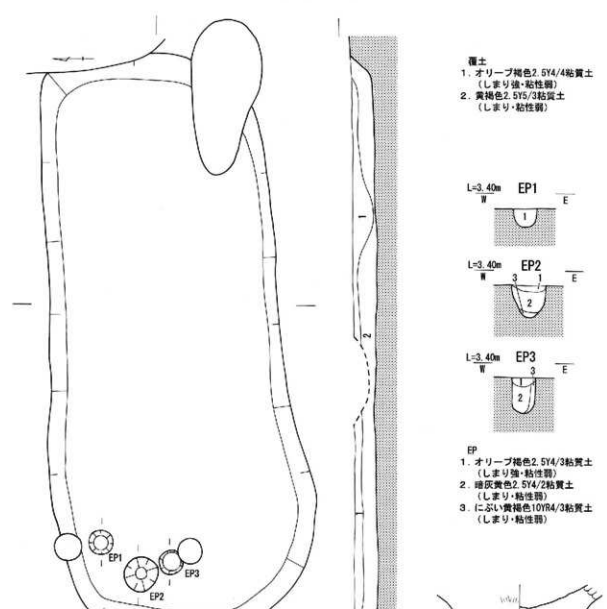
不明遺構12号（Ⅱ地区　SX2012）（第81・82図）

Ⅱ－５区東部中央，j・k３・４グリッドに位置し，北側はSX2011に切られる。東西長290cm 南北残存長294cm 深度24cm を測る不整な隅丸長方形を呈する不明遺構。断面は逆台形状で，埋土は２層である。EK１は遺構西側に位置し，南端を上層の遺構が切る。長軸残存長90cm 東西長84cm 深度30cm を測る不整形土坑。断面は不正な逆台形状で，北側に段を有する。埋土は４層である。

遺物は弥生土器片・甕，土師質土器杯，瓦片，サヌカイト片・石鏃，結晶片岩製石斧，砂岩製叩石が出土しているが，中世遺物は混入である。

175～179は甕。175は口縁端部に細い刻目を加える。体部内外面ともタテハケ調整を施す。胎土は粗く，結晶片岩を含む。176は外面ヘラミガキ，内面ハケのち横位のヘラミガキを施す。胎土に泥岩を含む。177は紀伊型とみられる。口縁部はヨコナデ，頸部はナデを施して平滑に仕上げる。胎土は粗く結晶片岩とみられる粒子および絹雲母を含む。178は口縁端部外面に薄い帯状の粘土を貼り付け，部分的に低い段を残す。胎土は粗く，泥岩を含む。179は紀伊型甕の底部。外面に粗い縦位のヘラケズリを加える。上げ底で，体底部との境が大きく外方に張り出し，立ち上がり部分が強く括れる。胎土は粗く，胎土に結晶片岩・泥岩・砂岩を含む。

180はサヌカイト製の平基式打製石鏃。基部と側縁部は直線的で，二等辺三角形に近い形状に仕上げる。181は結晶片岩製の太型蛤刃石斧。部分的に整形時の敲打痕を残すが，頭頂部を除いてよく研磨し

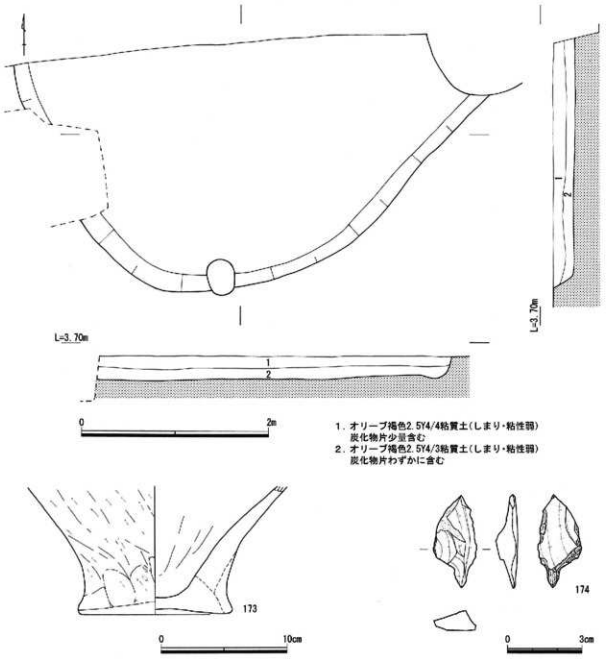


第79図　Ⅱ地区 SX2008遺構・遺物実測図

ている。刃部の一部を欠くが，叩石などに転用された痕跡はない。

不明遺構13号（Ⅱ地区　SX2013）（第83図）

Ⅱ－５区中央部北側，ｊ・ｋ３グリッドに位置し，北側をSX2011，東側をSX2012が切る。南北残存長252cm 東西残存長194cm 深度22cm を測る，不整な隅丸長方形を呈する土坑状遺構。断面は緩い逆台形状で，埋土は２層である。遺物は弥生土器片・壺・甕，須恵器片，サヌカイト片が出土しているが，



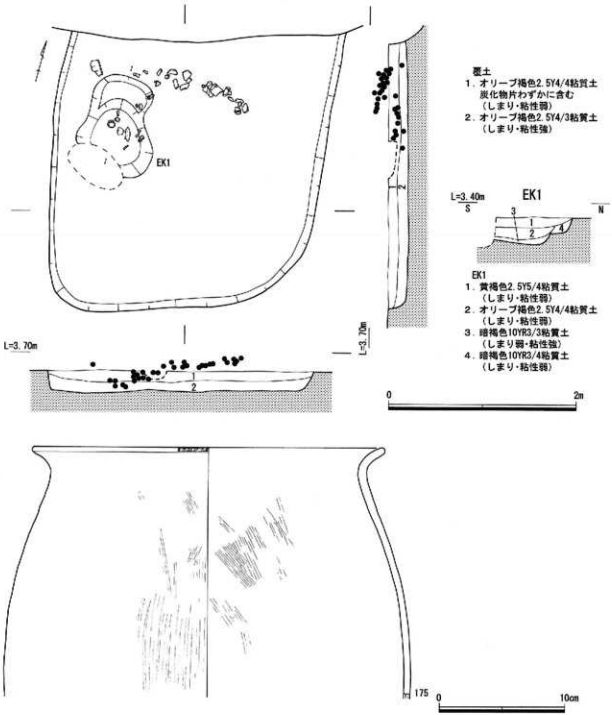
第80図　Ⅱ地区 SX2010遺構・遺物実測図

古代遺物は混入である。182は広口壺と考えられる土器。体部外面全体にヘラミガキを加え，上半部にはわずかな間隔をあけて櫛描直線文を施文する。胎土に結晶片岩を含む。

不明遺構15号（Ⅱ地区　SX2015）(第84図)

Ⅱ－５区東部南端，ｉ・ｊ４・５グリッドに位置し，南半は調査区外に延びるが，隣接するⅡ－４区では検出していない。東西長500cm 南北検出長226cm 深度30cm を測る円形の竪穴住居状遺構。断面は逆台形状で，埋土は２層，底面は平坦である。

EK１は遺構中央部東寄りに位置し，南は調査区外に延びる。長軸検出長88cm 短軸82cm 深度20cm を測る楕円形土坑。断面は緩い逆台形状で，埋土は２層である。EK２は，遺構北側に位置する。長軸80



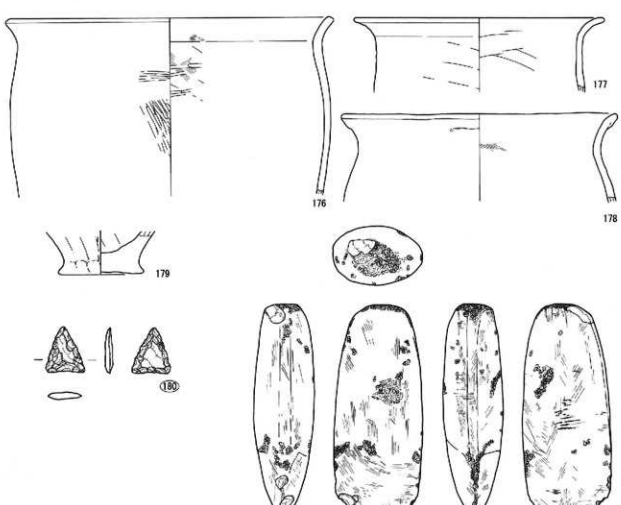
第81図　Ⅱ地区 SX2012遺構・遺物実測図（１）

cm 短軸78cm 深度24cm を測る隅丸方形状土坑。断面は逆台形状で，埋土は２層である。EPは６基検出し，径18～42cm 深度16～30cm を測る。EP１・２・５・６で柱痕とみられる土層が確認できる。配置は不規則。

遺物は弥生土器片，土師質土器片・皿，瓦片が出土しているが，中世遺物は混入である。

不明遺構16号（Ⅱ地区　SX2016）（第85図）

Ⅱ－７区南西隅，ｋ８・９グリッドに位置し，南半および西側の一部は調査区外に延びる。東西検出長



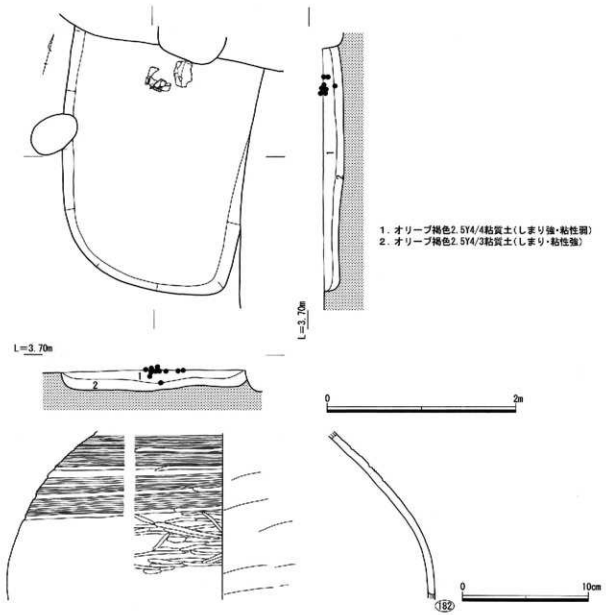
第82図　Ⅱ地区 SX2012遺物実測図（２）

510cm 南北検出長270cm 深度16cm を測る円形の竪穴住居状遺構。断面は浅い逆台形状で，埋土は２層である。遺構内遺構は確認できない。遺物は弥生土器片，瓦器椀，サヌカイト片・楔形石器・削器か，が出土しているが，中世遺物は混入である。183はサヌカイト製の小型削器であろうか。剥片の側縁部に両面から細かな調整を加えて刃部を作り出している。

不明遺構18号（Ⅱ地区　SX2018）（第86・87図）

Ⅱ－７区南東隅，１・m13・14グリッドに位置し，南は側溝，西は撹乱に切られる。東西検出長406cm 南北検出長346cm 深度12cm を測る円形の竪穴住居状遺構。遺構内遺構は確認できない。断面は浅い逆台形状で，埋土は１層，底面は平坦である。

遺物は弥生土器片・壺・甕，土師質土器片，砂岩製叩石・凹石・砥石が出土しているが，中世遺物は

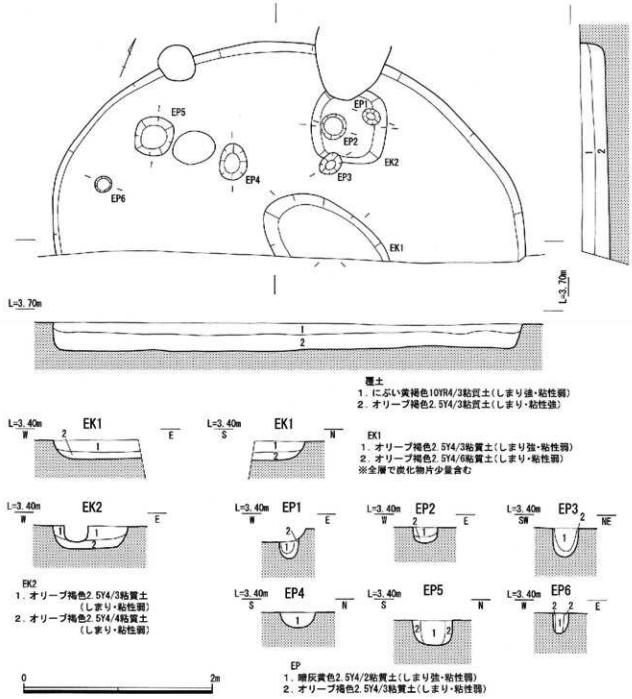


第83図　Ⅱ地区 SX2013遺構・遺物実測図

混入である。184は広口壺。外面タテハケのち頸部に櫛描直線文を３単位施文し，体部上半には櫛描の波状文と直線文を交互に施文する。胎土に結晶片岩を含む。185は壺と考えられる土器。厚い器壁をもつ。口縁端部に縦位の刻目を加える。186は砂岩製の叩石。両端は使用によって平らに潰れ，側面にも部分的に敲打痕が集中する。187は砂岩製の凹石で，表裏両面の中央部付近が使用によって丸くくぼむ。叩石としても使用され両端と側縁部に敲打痕を残す。188は砂岩製の砥石。表裏両面を砥面として使用する。被熱により部分的に赤く変色する。

不明遺構19号（Ⅱ地区　SX2019）(第88図)

Ⅱ－９区北東隅，ｐ・ｑ17グリッドに位置し，北側と東側は調査区外に延びる。隣接するⅡ－10区では確認されない。南北検出長340cm 東西検出長258cm 深度12cm を測る円形の竪穴住居状遺構。断面は

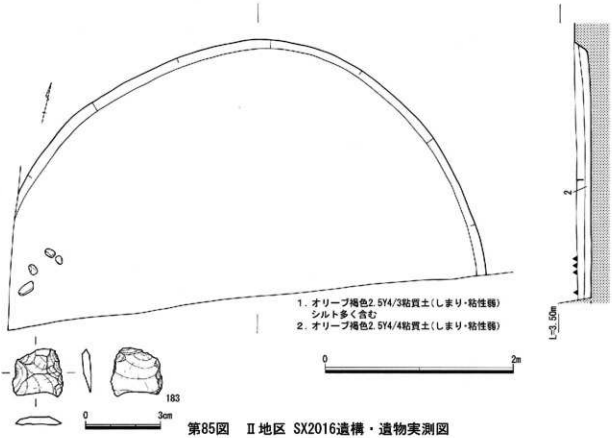


第84図　Ⅱ地区 SX2015遺構実測図

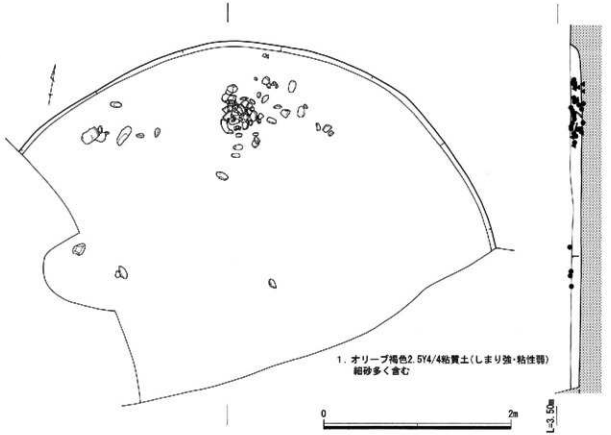
浅い逆台形状で，埋土は1層，底面は概ね平坦である。遺構内遺構は確認できない。

遺物は弥生土器片・壺・甕，須恵器杯蓋，土師質土器片・杯・皿，瓦片，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），瓦片が出土しているが，古代・中世遺物は混入である。

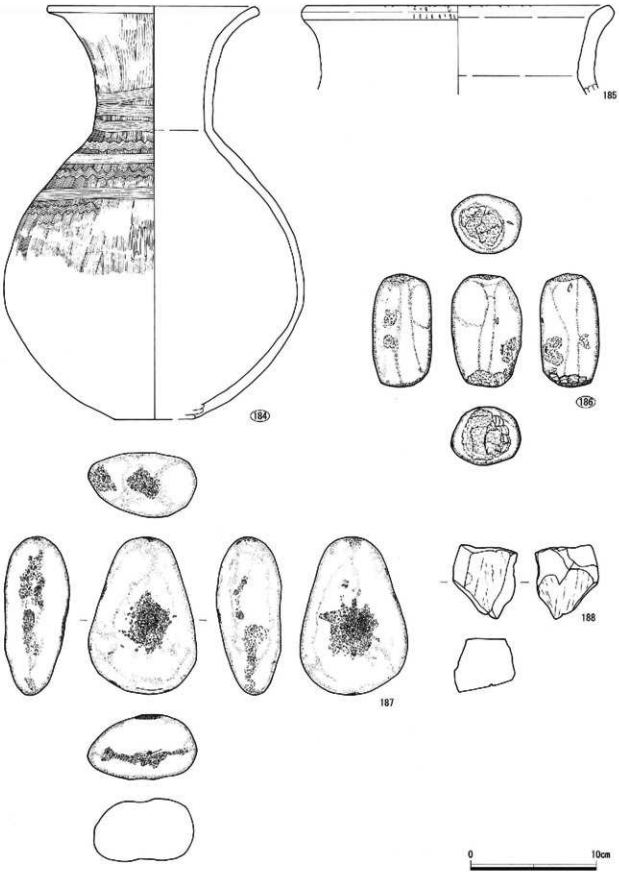
189は広口壺の口縁。口縁端部はヘラに緩急を付けて右方向に引きずりながら縦位の刻目を付ける。頸部外面にはタテハケのち櫛描直線文を施文し，口縁端部内面には円形刺突列と櫛描波状文を口縁に沿って交互に施文する。190も広口壺の口縁部であるが，遺存状態が悪く調整不明瞭である。191は広口壺の頸部から体部上位の破片。外面には櫛描直線文を不規則な間隔で施文する。胎土に結晶片岩を含む。



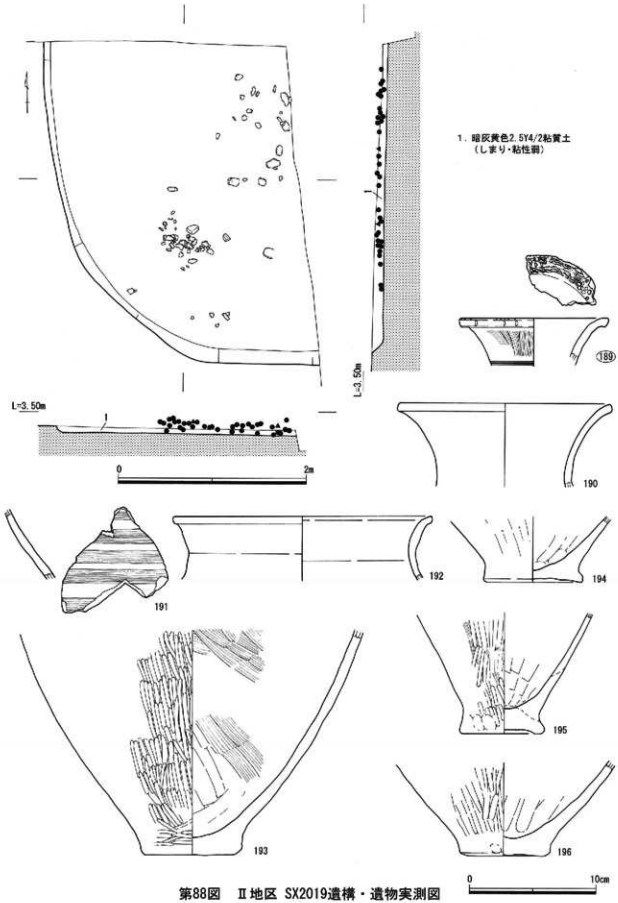
第85図　Ⅱ地区 SX2016遺構・遺物実測図



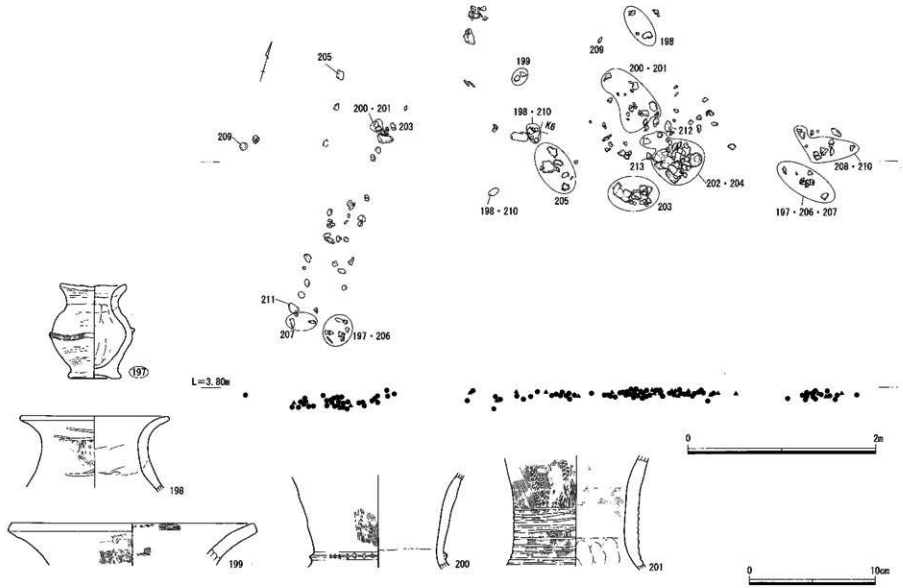
第86図　Ⅱ地区 SX2018遺構実測図



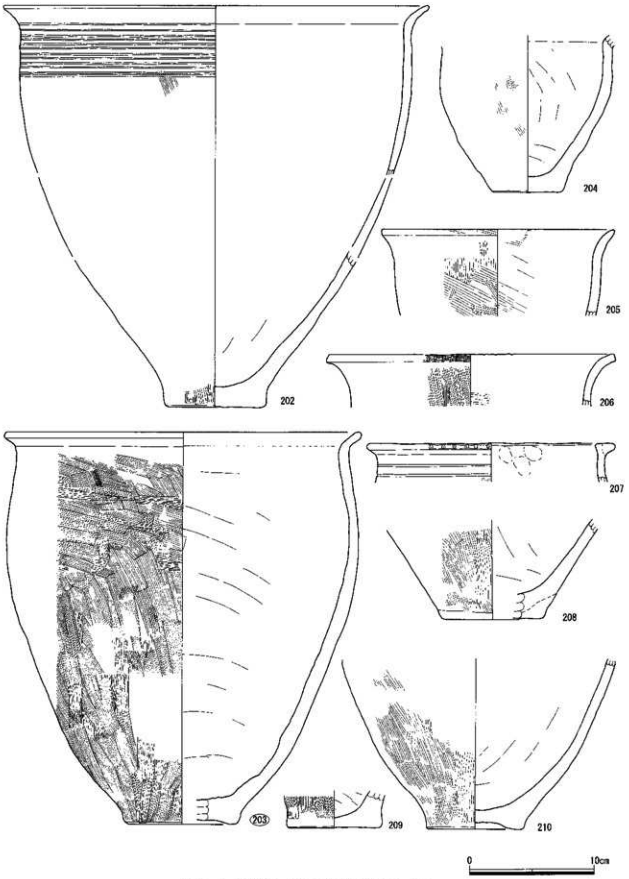
第87図　Ⅱ地区 SX2018遺物実測図



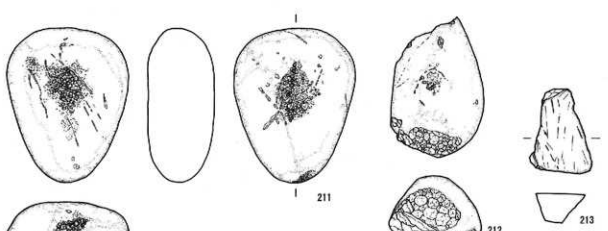
第88図　Ⅱ地区 SX2019遺構・遺物実測図



第89図　Ⅱ地区 SX2020遺物出土・遺物実測図（1）



第90図　Ⅱ地区 SX2020遺物実測図（２）



第91図　Ⅱ地区 SX2020遺物実測図（３）

192は甕の口縁部。胎土に結晶片岩を含む。193～196は甕の底部。193・196は平底で，体部外面に縦位の丁寧なヘラミガキを加える。ともに胎土に結晶片岩を含む。194は紀伊型の甕。外面にヘラケズリを加える。上げ底で，体底部の境が外方に大きく突出する。胎土は粗く，結晶片岩を含む。195も上げ底で，体底部の境が外方に大きく突出する。外面の調整は194とは異なりタテハケとヘラミガキを併用する。胎土は精良でチャートとみられる粒子を含む。

不明遺構20号（Ⅱ地区　SX2020）（第89～91図）

Ⅱ－５区東部，ｊ・ｋ５・６グリッドに位置する。第２遺構面直上で検出した土器溜まりで，東西696㎝南北370㎝の範囲に拡がる。土器の出土状況には疎密があり，遺存状態が良好なものを含むことから，住居や土坑等の遺構に伴うことが予想された。このため遺構の検出に努めたものの，遺構に所属すると認められる遺物はきわめて少なかった。

遺物は弥生土器片・壺・ミニチュア壺・甕，土師質土器片，砂岩製叩石・砥石，被熱砂岩礫が出土しているが，中世遺物は混入である。

197はミニチュアの壺で，器高は7.6㎝。口縁は短く外反し，端部は摩耗によって刻目は確認できない。体部は球形で，体底部との境は外方に突出し，底部は上げ底である。外面はヨコハケを施し，体部中位に凸帯を１条貼り付け縦方向の刻目を加える。内面に縦位のユビナデ痕を残す。胎土に金雲母および角閃石とみられる黒色粒子を含むため，搬入品と考えられる。

198・199は広口壺の口縁。198は外面にハケとヘラミガキを併用し，胎土は粗く結晶片岩を含む。199はハケ調整を施す。200・201は広口壺の頸部。200は頸部に刻目を加えた凸帯を貼り付け。胎土に結晶片岩を含む。201は外面タテハケのち横位のヘラ描き多条沈線を施す。胎土に泥岩・チャートを含む。

202～207は甕。202は体部外面タテハケのち上位に横位のヘラ描き多条沈線を施す。胎土は粗くチャートとみられる粒子を含む。203は外面全体にハケ調整を施す。胎土に砂岩を含む。204は口縁部を欠き，比較的厚い器壁をもつ。胎土は粗く，チャートを含む。205は口縁端部を含めて内外面にハケ調整を施す。胎土に砂岩を含む。206は口縁端部をヨコハケによって平坦に仕上げ，のち縦位の刻目を施す。体部内外面はハケで仕上げる。胎土にチャートとみられる粒子を含む。207は逆Ｌ字形の口縁を

もち，端部に刻目を加える。体部外面はハケののち，上位にヘラ描き沈線を引く。胎土に結晶片岩を含む。

208～210は壺または甕の底部。いずれも体部外面にハケ調整を施し，210は203の甕と類似した形状をもつ。胎土は208に砂岩，209に砂岩・泥岩・チャートか，210に結晶片岩・泥岩を含む。

211・212は砂岩製の叩石。211は表裏両面とも中央部に細かい敲打痕を残す。212は端部を敲打によって平らに潰れる。213は砂岩片で，平坦面の一部が摩耗し擦痕を残すため，台石または砥石の一部とみられる。自然石の可能性もある。

土坑17号（Ⅱ地区　SK2017）（第92図）

Ⅱ－４区東部北端，ｊ５・６グリッドに位置し，北側は調査区外に延びるが，隣接するⅡ－５区では確認できない。東西長170cm南北検出長88cm深度12cmを測る不整円形土坑。断面は浅い皿状で，埋土は２層。遺物は弥生土器片・壺，被熱砂岩礫が出土。214は広口壺の体部。体部外面にハケ調整を施し，のち２条凸帯を貼り付け刻目を加える。その上下にヘラ描き沈線を３条ずつ施文する。内面にハゼ痕がみられる。胎土に在地産花崗岩を含む。

土坑18号（Ⅱ地区　SK2018）（第93・94図）

Ⅱ－４区北東隅，ｉ・ｊ６グリッドに位置し，北側は調査区外に延びるが，隣接するⅡ－５区では検出していない。長軸検出長256cm短軸150cm深度16cmを測る不整な楕円形土坑。断面は浅い皿状で，埋土は２層である。

遺物は弥生土器片・甕・壺，土師質土器片，黒色土器片，サヌカイト片・楔形石器が出土しているが，古代・中世遺物は混入である。215・216は甕。215は口縁端部に刻目を加え，体部上位に横位のヘラ描きの沈線を12条引く。胎上にチャート・砂岩を含む。216は頸部内面ににぶい稜を残す。口縁端部に刻目を加え，頸部～体部上位にかけて横位のヘラ描き沈線を４条引く。胎土に泥岩を含む。217は壺または甕で，外面にハケ調整を施す。胎土にチャートとみられる粒子・砂岩・泥岩を含む。218は壺で，体部外面はハケのちヘラミガキ調整を施す。胎土に在地花崗岩・チャート・砂岩を含む。219はサヌカイト剥片の折断面に両極打法の痕跡を残す楔形石器。

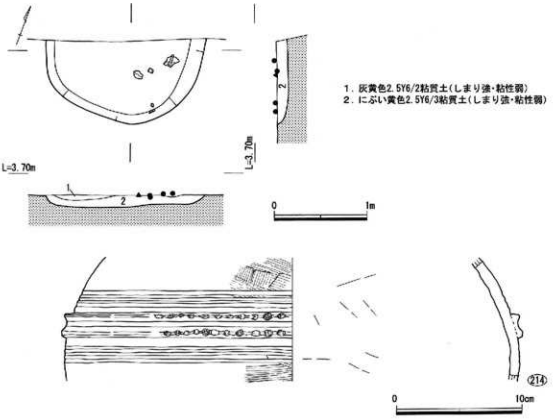
土坑19号（Ⅱ地区　SK2019）（第95図）

Ⅱ－４区北東隅，ｉ・ｊ６グリッドに位置し，東側を除いて３方を遺構に切られる。長軸残存長120cm短軸118cm深度20cmを測る楕円形土坑。断面は逆台形状で，埋土は３層である。

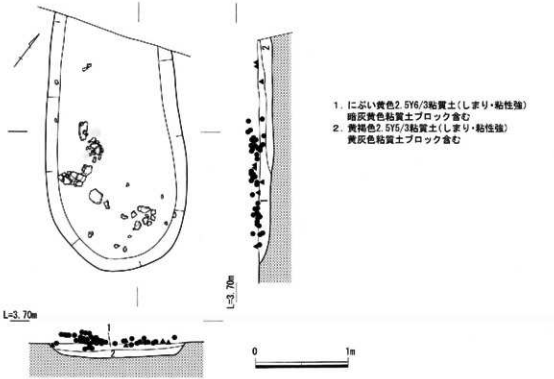
遺物は弥生土器片・甕，砂岩製凹石，被熱砂岩礫が出土。220は甕。口縁部に凸帯を貼り付けて逆Ｌ字形に仕上げる。体部外面にタテハケを施す。221は紀伊型の甕と考えられる土器。体部外面に粗いヘラケズリを施す。底部はやや上げ底で，底体部の境の括れは小さい。胎土に結晶片岩を含む。222は砂岩製の凹石。１面のみ使用する。

土坑20号（Ⅱ地区　SK2020）（第96図）

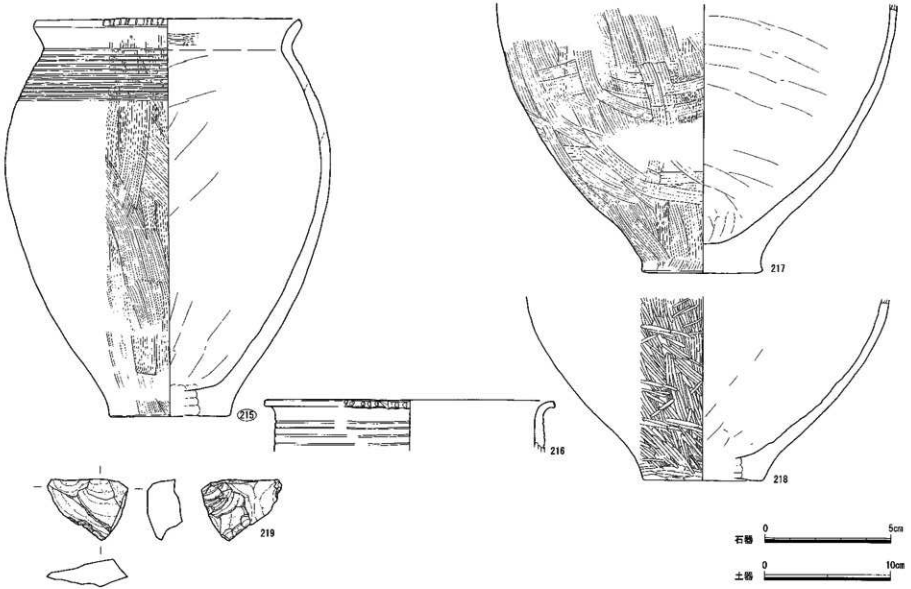
Ⅱ－４区北東隅，ｉ・ｊ５・６グリッドに位置する。長軸518cm短軸138cm深度12cmを測る隅丸長方形土坑。断面はきわめて浅い皿状で，埋土は２層である。遺物は弥生土器片，砂岩製不明石器が出土。223は砂岩円礫から剥ぎ取った剥片の縁辺に研磨を加えた石器で，背面と主剥離面は自然面のまま残す。



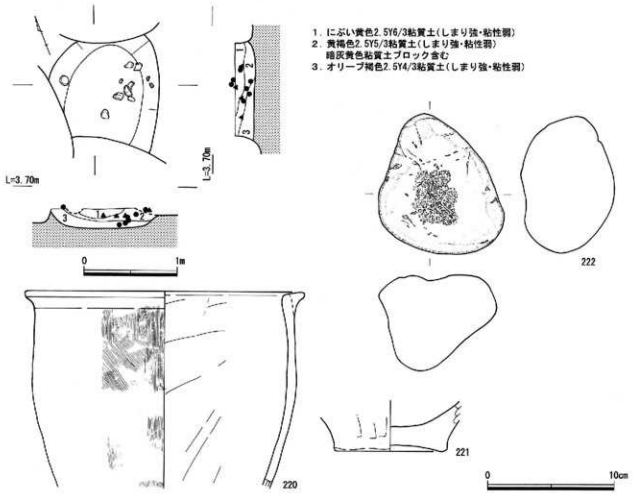
第92図　Ⅱ地区 SK2017遺構・遺物実測図



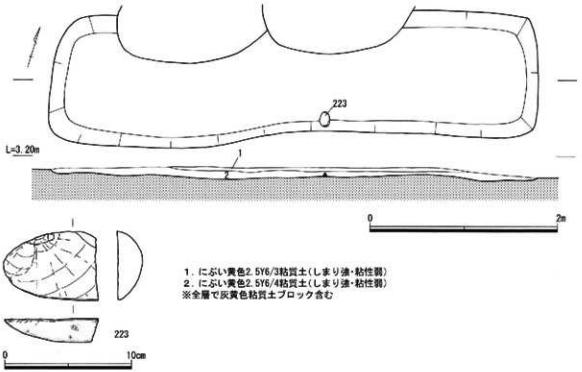
第93図　Ⅱ地区 SK2018遺構実測図



第94図　Ⅱ地区 SK2018遺物実測図



第95図　Ⅱ地区 SK2019遺構・遺物実測図



第96図　Ⅱ地区 SK2020遺構・遺物実測図

用途は不明であるが，掻器としての使用により磨耗した可能性も考えられる。

土坑31号（Ⅱ地区　SK2031）（第97図）

Ⅱ－5区西部中央，ｉ19グリッドに位置する。長軸138cm 短軸102cm 深度24cm を測る不整な楕円形土坑。断面は逆台形状で，埋土は1層である。遺物は弥生土器片・壺が出土。224は広口壺の口縁部。口縁端部はヨコナデにより中央を凹線状にくぼませ，細かい刻目を加える。外面タテハケ，内面ヨコハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。

土坑32号（Ⅱ地区　SK2032）（第98図）

Ⅱ－5区西部中央，ｉ・ｊ19グリッドに位置する。長軸154cm 短軸116cm 深度22cm を測る隅丸長方形土坑。断面は方形で，埋土は1層である。遺物は弥生土器片・壺・甕が出土。225は広口壺と考えられる土器。外面タテハケのち部分的に横位のヘラミガキを施し，ヘラ先で横位の平行沈線を引く。胎土に結晶片岩・砂岩を含む。

土坑33号（Ⅱ地区　SK2033）（第99図）

Ⅱ－5区西部中央，ｉ・ｊ19グリッドに位置する。長軸208cm 短軸116cm 深度16cm を測る隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は2層である。遺物は弥生土器壺・甕が出土。226は壺と考えられる土器。外面にタテハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。

土坑34号（Ⅱ地区　SK2034）（第100図）

Ⅱ－5区西部北側，ｊ18・19グリッドに位置する。長軸310cm 短軸122cm 深度68cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は逆台形状で，埋土は3層である。

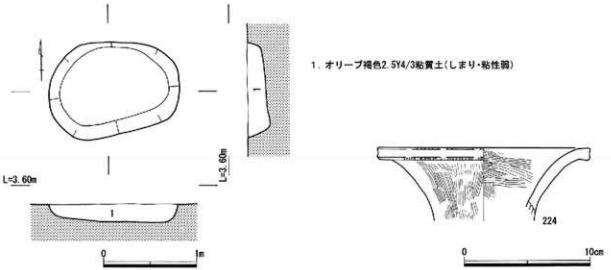
遺物は弥生土器片・壺・甕，土師質土器椀，サヌカイト片が出土しているが，中世遺物は混入である。227は広口壺とみられる土器の体部。体部外面に櫛描の直線文と波状文を交互に施文し，そのドには三角形の刺突を加える。胎土に結晶片岩を含む。228は紀伊型甕の底部。体部外面に縦位のヘラケズリを加える。底体部の境が外方に大きく突出し，大きな括れをもつ。胎土に結晶片岩を含む。

土坑35号（Ⅱ地区　SK2035）（第101図）

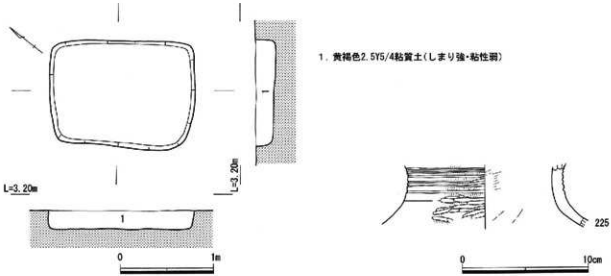
Ⅱ－5区西部北側，ｊ19グリッドに位置する。長軸100cm 短軸96cm 深度10cm を測る不整な隅丸方形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は1層である。遺物は弥生土器片・壺・甕が出土。229は広口壺。口縁端部はヨコナデにより中央部を浅い凹線状にくぼませ，上下には細かい刻目を加える。外面は体部中位以上にタテハケ，下位に縦位のヘラミガキを施す。胎土に結晶片岩を含む。

土坑42号（Ⅱ地区　SK2042）（第102図）

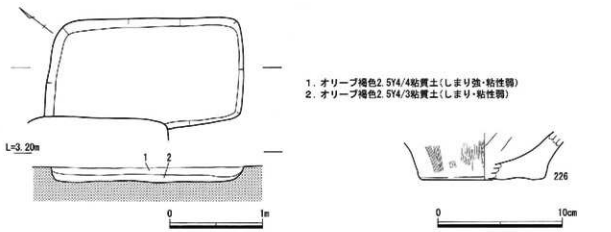
Ⅱ－5区中央部，ｉ・ｊ1・2グリッドに位置し，南と東を遺構に切られる。長軸残存長240cm 短軸212cm 深度34cm を測る不整形土坑。断面は逆台形状で，埋土は2層である。遺物は弥生土器片・甕，瓦片，鉄釘，サヌカイト片が出土しているが，瓦片・鉄釘は混入である。230は甕の底部。上げ底で，底体部の境が外方に大きく突出し，強い括れをもつ。胎土に泥岩を含む。



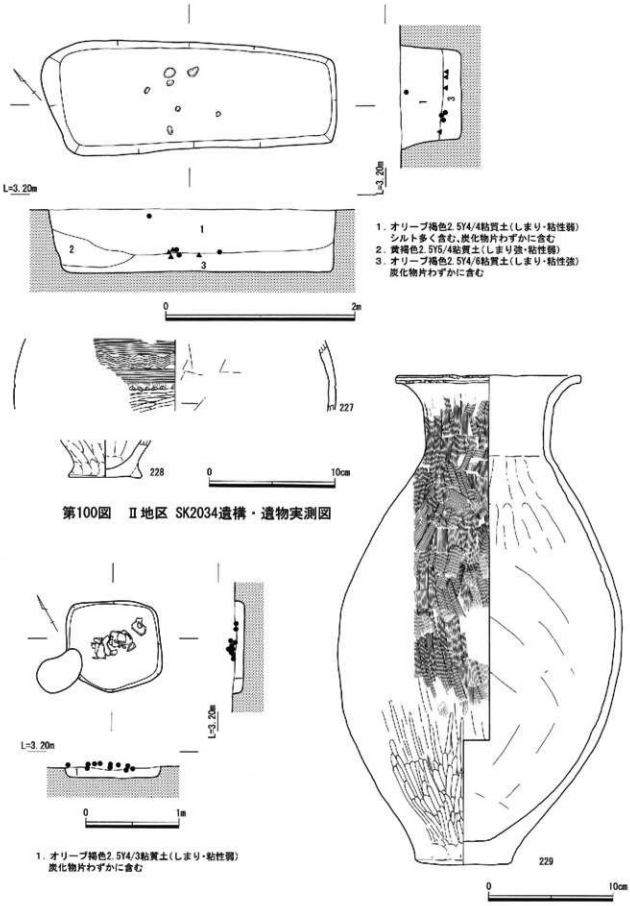
第97図　Ⅱ地区 SK2031遺構・遺物実測図



第98図　Ⅱ地区 SK2032遺構・遺物実測図



第99図　Ⅱ地区 SK2033遺構・遺物実測図



第100図　Ⅱ地区 SK2034遺構・遺物実測図

第101図　Ⅱ地区 SK2035遺構・遺物実測図

土坑43号（Ⅱ地区　SK2043）（第103図）

Ⅱ－５区中央部，ｊ２グリッドに位置する。長軸164cm 短軸76cm 深度48cm を測る不整形土坑。断面は不整な逆台形状で，段を有する。埋土は４層である。遺物は弥生土器片・甕，砂岩製叩石が出土。231は砂岩製の叩石。両端と側縁部の稜線に沿って細かい敲打痕を残す。

土坑48号（Ⅱ地区　SK2048）（第104図）

Ⅱ－５区中央部北端，ｋ19･20グリッドに位置する。長軸176cm 短軸118cm 深度14cm を測る不整形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は１層である。

遺物は弥生土器片・壺・甕が出土。232は広口壺。頸部に凸帯を２条貼り付け，先端が叉状に分かれた工具を使い連続刺突を施す。凸帯の間には横位のヘラ描きの沈線を施文。胎土に金雲母・泥岩を含む。233も壺で，外面にはハケのちヘラミガキによる調整を施す。破損のちに二次被熱の可能性あり。234は甕または壺の底部。器壁は厚く，外面にはタテハケを施す。胎土に金雲母・チャートを含む。

土坑55号（Ⅱ地区　SK2055）（第105図）

Ⅱ－５区東部北側，ｋ４グリッドに位置し，西側をSX2010に切られる。長軸残存長238cm 短軸112cm 深度20cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状または皿状で，埋土は１層。遺物は弥生土器片，土師質土器皿，砂岩製叩石が出土しているが，中世遺物は混入。235は扁平な砂岩円礫を用いた叩石。全体の７割を欠失。表面と側面に細かい敲打痕を残し，側縁の一部に強い打撃による剥離を伴う。

土坑71号（Ⅱ地区　SK2071）（第106図）

Ⅱ－５区東端部，ｋ６グリッドに位置する。長軸150cm 短軸92cm 深度20cm を測る隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は２層である。遺物は弥生土器片・壺・甕が出土。236は甕。体部上位にヘラまたは半截竹管を用いて平行する２条の沈線を引く。胎土に結晶片岩を含む。

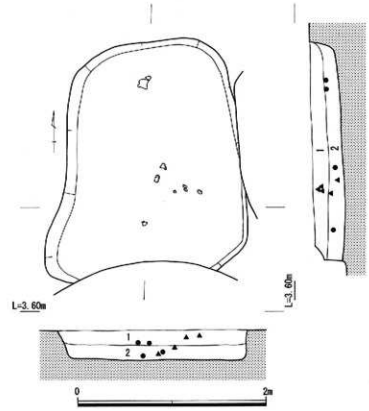
土坑78号（Ⅱ地区　SK2078）（第107図）

Ⅱ－５区東端部，ｋ７グリッドに位置する。長軸108cm 短軸56cm 深度34cm を測る不整な楕円形土坑。断面は逆台形状で，埋土は２層である。遺物は弥生土器片・甕が出土。237は甕。口縁端部に刻目，体部上位に横位のヘラ描き沈線文を９条施文する。頸部内面にハケ調整を施す。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。238は甕の底部と考えられる土器。胎土は粗く，泥岩を含む。

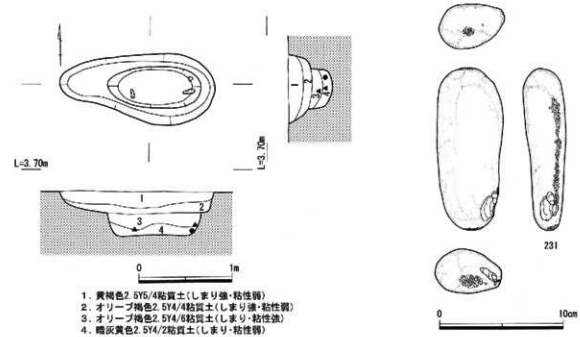
土坑80号（Ⅱ地区　SK2080）（第108図）

Ⅱ－５区南東隅，ｊ･ｋ６･７グリッドに位置し，東側と南側は調査区外に延びるが，隣接するⅡ－４区では検出していない。東西検出長180cm 南北検出長168cm 深度28cm を測る不整形土坑。断面は皿状で，不明瞭な段を有する。埋土は１層である。

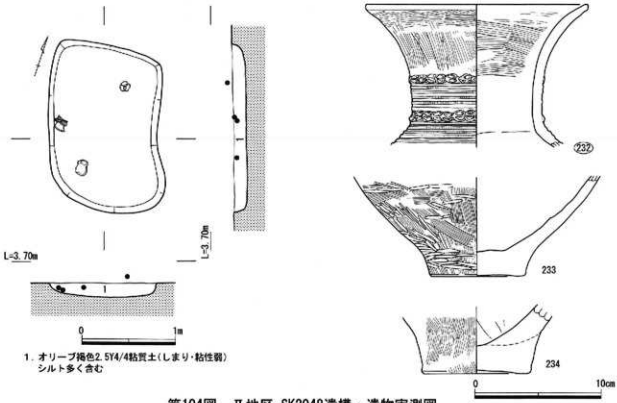
遺物は弥生土器片・壺・甕，土師質土器片が出土しているが，中世遺物は混入。239は細頸壺の頸部。頸部外面にほぼ等間隔で細かい櫛描直線文を施文し，その間に横位のヘラミガキを加える。頸体部の境に櫛描波状文を施文。胎土に金雲母と角閃石を含むため，瀬戸内沿岸からの搬入品と考えられる。



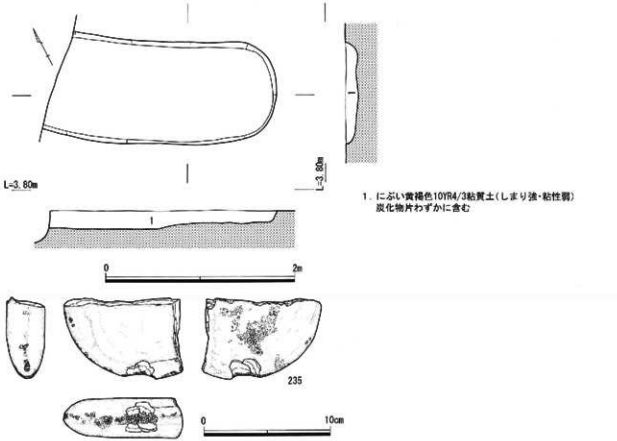
第102図　Ⅱ地区 SK2042遺構・遺物実測図



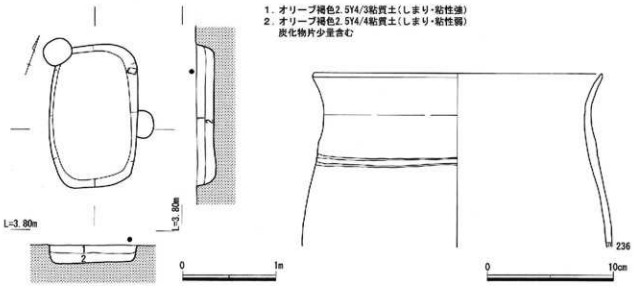
第103図　Ⅱ地区 SK2043遺構・遺物実測図



第104図　Ⅱ地区 SK2048遺構・遺物実測図

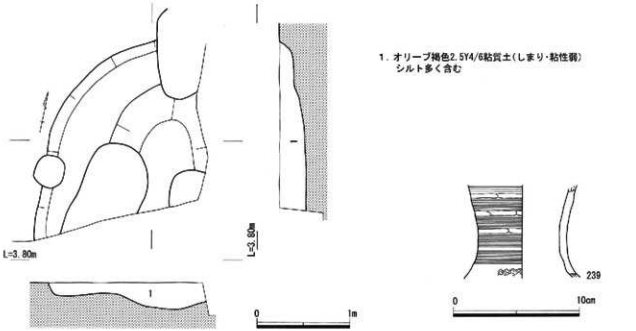


第105図　Ⅱ地区 SK2055遺構・遺物実測図



第106図　Ⅱ地区 SK2071遺構・遺物実測図

第107図　Ⅱ地区 SK2078遺構・遺物実測図



第108図　Ⅱ地区 SK2080遺構・遺物実測図

土坑89号（Ⅱ地区　SK2089）（第109図）

Ⅱ－7区中央部，Ⅰ10・11グリッドに位置する。長軸118cm 短軸90cm 深度12cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は1層である。出土遺物は1点のみで，240はサヌカイト製の凸基式打製石鏃。図の左側縁は両面から調整を加え，右側縁は一部のみの調整にとどまる。基部と先端部分は未調整のまま残す。

土坑91号（Ⅱ地区　SK2091）（第110図）

Ⅱ－8区中央部北端，ｐ10グリッドに位置する。長軸残存長150cm 短軸100cm 深度16cm を測る不整形土坑。断面は浅い皿状で，埋土は1層である。遺物は弥生土器片，サヌカイト製石鏃が出土。241はサヌカイト製の凸基式打製石鏃。側縁部は左右非対称である。基部近くにわずかな段を設けていることから凸基有茎式の可能性がある。

土坑92号（Ⅱ地区　SK2092）（第111・112図）

Ⅱ－8区中央部南側，ｎ・ｏ10グリッドに位置する。長軸202cm 短軸124cm 深度50cm を測る不整形土坑。断面は逆台形状で，南寄りに上からの掘削による落ち込みがみられる。埋土は3層である。

遺物は弥生土器壺・甕，上製紡錘車，サヌカイト片・石鏃が出土。242は広口壺。頸部内外面とも縦位の太いヘラミガキを施す。胎土に砂岩・泥岩を含む。243は広口壺と考えられる。外面の頸部から体部上半に櫛描の直線文と波状文を交互に施文。胎土に結晶片岩を含む。244～246は甕。244は遺存状態が悪く器面調整は不明。胎土に結晶片岩を含む。245は長胴で，外面の体部上位がタテハケ，下位は縦位のヘラミガキを施す。器面は二次被熱により部分的に発泡。胎土に結晶片岩を含む。246は口縁端部に刻目，外面全面に細かいタテハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。

247～250は紡錘車。土器片の縁辺部を打ち欠いて円盤状に整形し，中央を穿孔。248・250は未貫通である。胎土は，247・248に結晶片岩と絹雲母，249・250は結晶片岩を含む。

251はサヌカイト製の凹基式打製石鏃。基部両端をにぶく尖らせる。

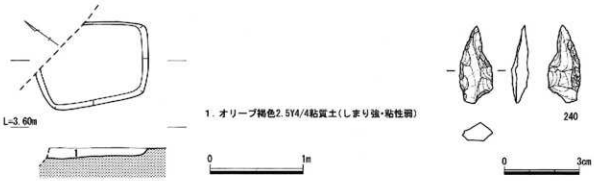
土坑94号（Ⅱ地区　SK2094）（第113図）

Ⅱ－8区北西隅，ｐ8・9グリッドに位置し，北側は調査区外に延びる。南北検出長82cm 東西検出長70cm 深度68cm を測る不整形土坑。断面は方形で，埋土は3層である。

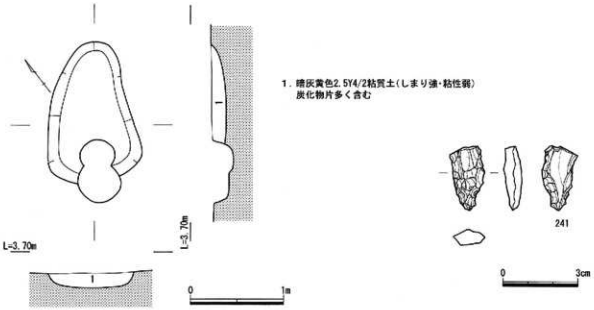
遺物は弥生土器壺・甕，サヌカイト片が出土。252は広口壺。口縁端部はヨコナデによって凹線状に浅くくぼむ。頸部外面にタテハケ，内面はヨコハケを施す。胎土に絹雲母を含む。253は甕の底部。体底部の境が強く外方に突出し，体部の立ち上がりが大きく括れる。胎土は粗く，結晶片岩と金雲母を含む。器形と胎土から紀伊型甕の可能性あり。254は壺と考えられる。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。

土坑97号（Ⅱ地区　SK2097）（第114・115図）

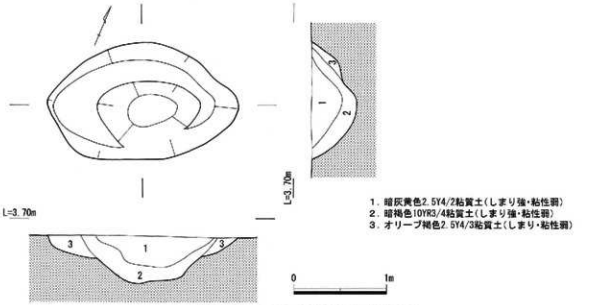
Ⅱ－9区西部中央，ｎ・ｏ14グリッドに位置する。長軸312cm 短軸168cm 深度46cm を測る不整形土坑。断面は皿状で，埋土は3層である。遺物は縄文土器片，弥生土器壺，砂岩製叩石，焼土ブロックが出土。255は広口壺の口縁と考えられる。胎土に結晶片岩を含む。256は壺。体部外面はタテハケのち縦位のヘラミガキ調整を施す。胎土に結晶片岩を含む。257・258は砂岩礫を使用した叩石。257は両端と側面の一



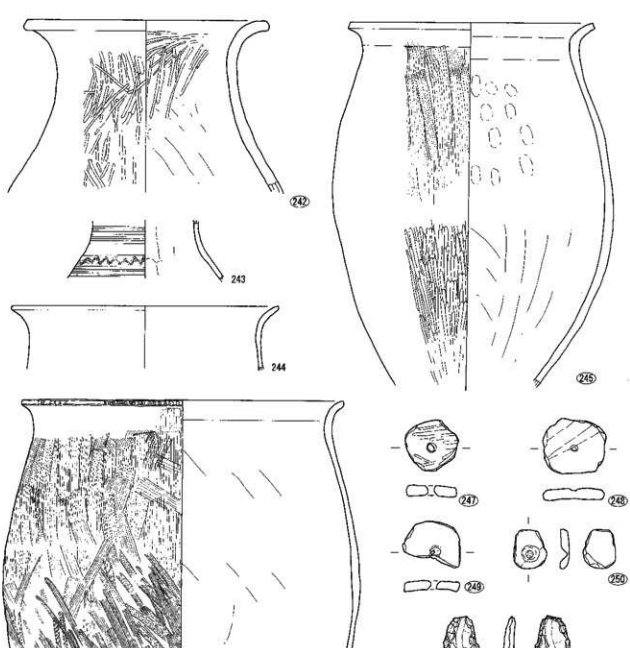
第109図　Ⅱ地区 SK2089遺構・遺物実測図



第110図　Ⅱ地区 SK2091遺構・遺物実測図



第111図　Ⅱ地区 SK2092遺構実測図

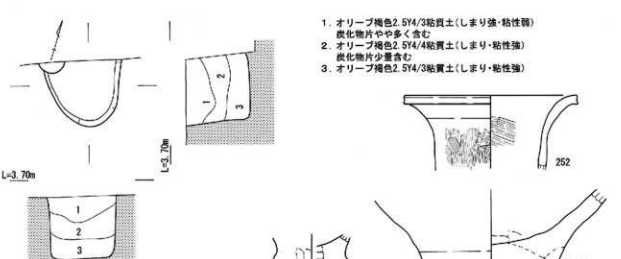


第112図　Ⅱ地区 SK2092遺物実測図

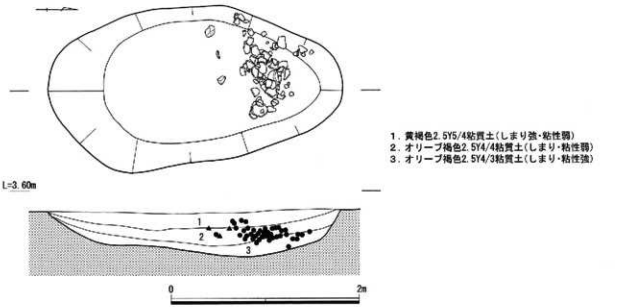
部に敲打痕を残す。

土坑103号（Ⅱ地区　SK2103）（第116図）

Ⅱ－9区北東隅，p・q16・17グリッドに位置し，北東部をSK2019に切られる。長軸312cm 短軸134



第113図　Ⅱ地区 SK2094遺構・遺物実測図



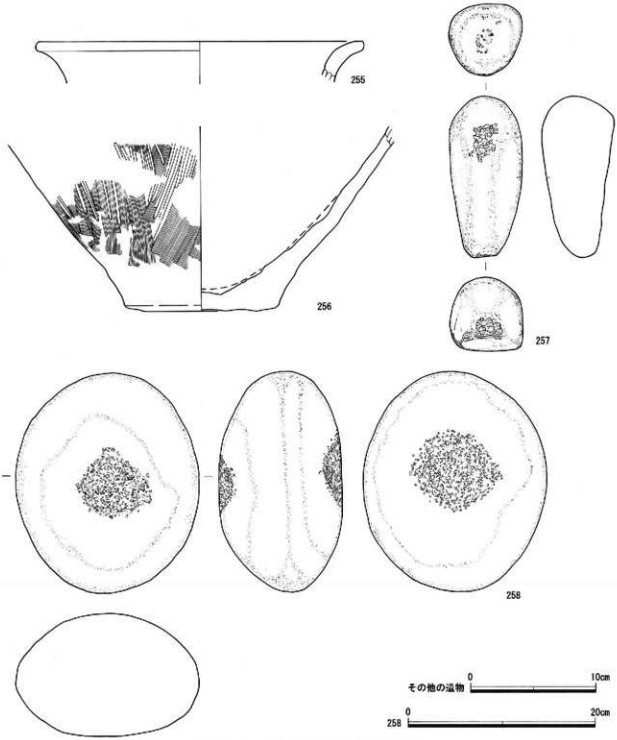
第114図　Ⅱ地区 SK2097遺構実測図

cm 深度34cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は不整な逆台形状で，埋土は３層である。遺物は弥生土器壺・甕，須恵器杯，土師質土器片，瓦片，サヌカイト製楔形石器が出土しているが，古代・中世遺物は混入である。259は紀伊型とみられる甕。口縁端部をわずかに上方に折り返す。胎土に特徴はない。260はサヌカイト製の楔形石器。剥片を折断し，側縁部に粗い調整を加える。

土坑104号（Ⅱ地区　SK2104）(第117・118図)

Ⅱ－10区西端部，q・r 14グリッドに位置し，西と南は調査区外に延びる。東西検出長136cm 南北検出長188cm 深度38cm を測る不整形土坑。断面は緩い逆台形状で，埋土は４層である。

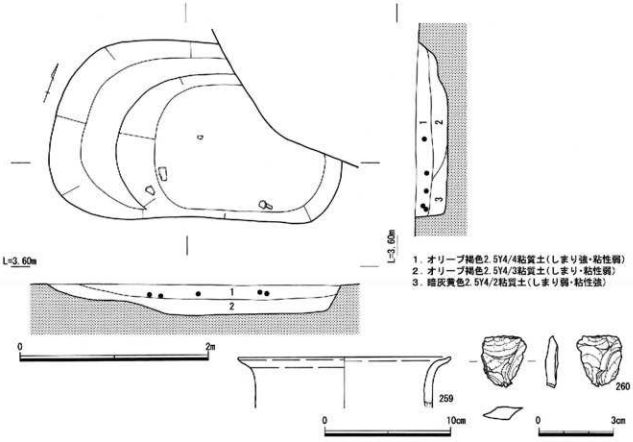
遺物は弥生土器壺・甕・高杯，土師質土器杯・羽釜，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具，備前陶器片，砂岩



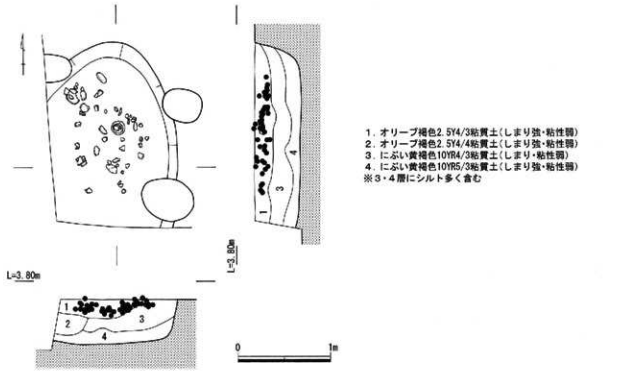
第115図　Ⅱ地区 SK2097遺物実測図

製叩石，被熱砂岩礫が出土しているが，古代・中世遺物は混入である。

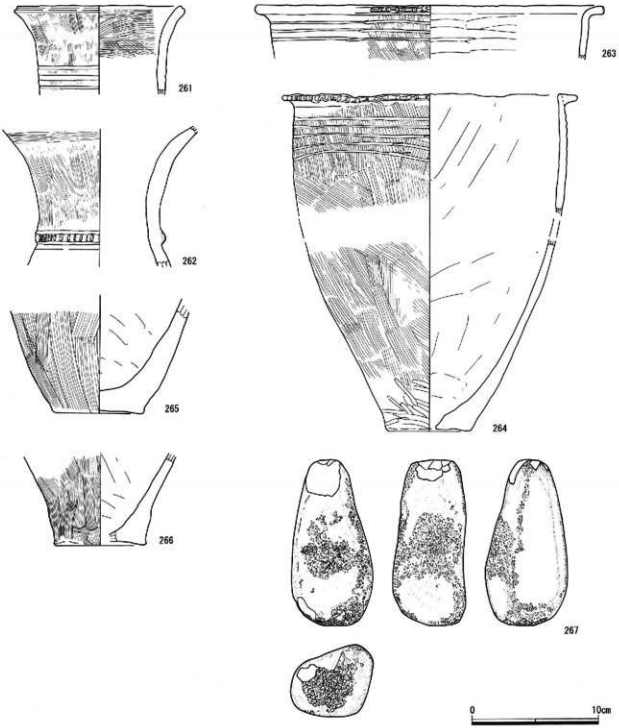
261は壺。口縁端部は平凹線状に浅くくぼむ。頸部外面はタテハケのち横位のヘラ描き沈線を施文する。胎土に砂岩・泥岩・チャートを含む。262は広口壺。頸部外面にはタテハケを施し，体部の境には凸帯を1条貼り付けヘラ先による刻目を付ける。胎土に砂岩・チャートを含む。263は甕。口縁端部にヘラ先で刻目を加え，体部上位に横位のヘラ描の平行沈線を3条施文する。胎土に砂岩・泥岩を含む。



第116図　Ⅱ地区 SK2103遺構・遺物実測図



第117図　Ⅱ地区 SK2104遺構実測図



第118図　Ⅱ地区 SK2104遺物実測図

264は甕。甕の底部に焼成後穿孔を加える。逆L字形口縁をもち，口縁端部に刻目を施す。外面体部上位はタテハケのちヘラ描き平行沈線を５条施文する。下端部にはヘラミガキを施す。胎土に結晶片岩を含む。265・266は甕の底部。いずれも体部外面はタテハケ調整を施す。胎土にチャートを含む。

267は砂岩製の叩石。礫の両端と側面にはそれぞれ敲打痕が集中する。

土坑105号（Ⅱ地区　SK2105）（第119図）

Ⅱ－10区西端部，r14グリッドに位置し，北と西は調査区外に延び，南は遺構に切られる。東西検出長140cm南北検出長122cm深度48cmを測る不整形土坑。断面は緩い逆台形状で，埋土は3層である。

遺物は弥生土器甕・蓋・壺，サヌカイト片，砂岩製叩石が出土。268は甕の蓋。内外面とも下半はハケ調整を施す。胎土にチャートとみられる粒子を含む。269・270は甕。269は頸部内面ににぶい稜を残す。体部外面にタテハケを施し，上位にヘラ描き平行沈線を5条施文する。胎土にチャートを含む。270は口縁端部に密な刻目を加え，頸部から体部上位にヘラ描き平行沈線を3条施文する。胎土に砂岩・チャートとみられる粒子を含む。271は壺の底部。厚い器壁をもち，体部外面はタテハケのちヘラミガキ調整する。胎土にチャートを含む。272は砂岩製の叩石。端部から側縁部にかけて敲打痕を多く残す。

土坑106号（Ⅱ地区　SK2106）（第120図）

Ⅱ－10区西部，q・r15・16グリッドに位置する。長軸260cm短軸82cm深度40cmを測る不整形土坑。断面は不整な逆台形状で，南側がやや落ち込む。埋土は3層である。

遺物は弥生土器甕・壺，土師質土器片，瓦器椀，サヌカイト片，砂岩製砥石が出土しているが，中世遺物は混入である。273は壺または甕の体部と考えられる。外面はタテハケのち櫛描の直線文と波状文を施文する。胎土に結晶片岩を含む。274・275はいずれも砂岩製の砥石。274は大型の砂岩をそのまま砥石として使用する。275は方形の整状に形を整え，表裏両面と側面の3面を砥面として使用。砥面は全体に凹凸が目立つ。

溝2号（Ⅱ地区　SD2002）（第121図）

Ⅱ－3・5区，i・j17～3グリッドに位置する。全長30.6m幅120cm深度28cmを測る，N79°Eの主軸をもつ東西方向の溝。断面はレンズ状で，埋土は2層である。底面は東から西に向けて若干下がる。西端部は大きく拡がって途切れる。遺構面自体も西へ向けて落ち込むことから，居住域の排水等を担ったと考えられる。遺構面の落ち込みは，自然流路の名残と考えられる。遺物は弥生土器片・甕が出土。

小穴36号（Ⅱ地区　SP2036）（第122図）

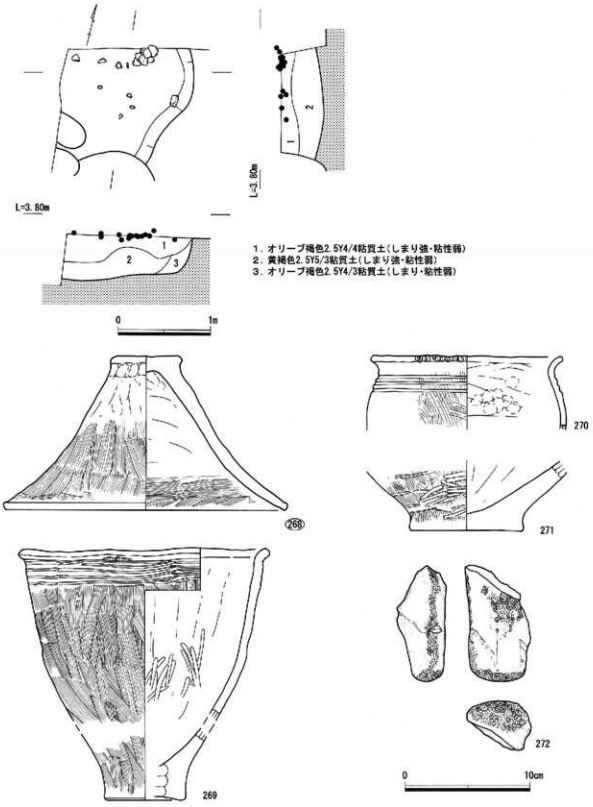
Ⅱ－5区西部北側，j19グリッドに位置する。径52cm深度13cmを測る不整形の小穴。遺物は弥生土器片・甕が出土。276は甕の底部。体部外面にタテハケを施す。胎土に金雲母を含む。

小穴94号（Ⅱ地区　SP2094）（第123図）

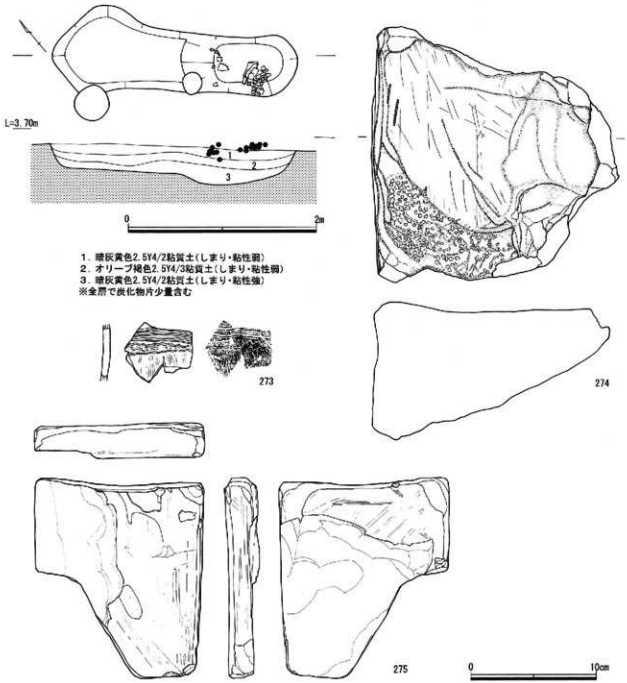
Ⅱ－5区東部中央，k5グリッドに位置する。径40cm深度15cmを測る不整形の小穴。遺物は弥生土器片・壺が出土。277は広口壺の頸部と考えられる。外面はタテハケのち櫛描直線文を間隔をあけて施文する。胎土に結晶片岩を含む。

小穴115号（Ⅱ地区　SP2115）（第124図）

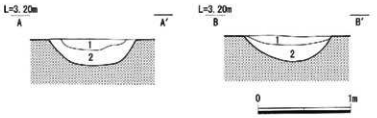
Ⅱ－5区東部南側，j5グリッドに位置する。径52cm深度10cmを測る楕円形の小穴。遺物は弥生土器壺が出土。278は広口壺。口縁は器壁が厚く，内外面ともに横位の丁寧なヘラミガキを施す。胎土にチャートとみられる粒子を含む。



第119図　Ⅱ地区 SK2105遺構・遺物実測図



第120図　Ⅱ地区 SK2106遺構・遺物実測図



第121図　Ⅱ地区 SD2002遺構断面図

小穴136号（Ⅱ地区　SP2136）（第125図）

Ⅱ－5区東部中央，k5グリッドに位置する。径83cm 深度32cm を測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は弥生土器片・壺・甕が出土。279は広口壺。口縁端部はヘラ先による刻目を加える。外面タテハケ，内面は横位のヘラミガキを施す。胎土に網雲母を含む。

小穴174号（Ⅱ地区　SP2174）（第126図）

Ⅱ－5区南東隅，j6グリッドに位置する。径34cm 深度20cm を測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで，280は叩石。叩石に多用される砂岩ではなく，石英質片岩の自然礫を用いる。敲打面が平らに潰れ粗い剥離痕を多く残すが，石質に起因するものか，使用法によるものかは不明である。

小穴210号（Ⅱ地区　SP2210）（第127図）

Ⅱ－7区北西隅，m・n9グリッドに位置する。径74cm 深度15cm を測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで，281は紀伊型甕の底部と考えられる。体底部との境が外方に大きく突出し，括れをもつ。胎土に結晶片岩を含む。

小穴216号（Ⅱ地区　SP2216）（第128図）

Ⅱ－8区南西隅，n9グリッドに位置する。径30cm 深度23cm を測る不整円形の小穴。出土遺物は1点のみで，282は広口壺。口縁端部にヘラ先で斜格子文を描く。胎土に結晶片岩を含む。

小穴230号（Ⅱ地区　SP2230）（第129図）

Ⅱ－8区中央部北側，p10グリッドに位置する。径34cm 深度25cm を測る不整円形の小穴。遺物は弥生土器片，サヌカイト製石鏃が出土。283はサヌカイト製の凸基式打製石鏃。調整は縁辺部に限られ，表裏両面とも剥片本来の剥離面を大きく残す。

小穴240号（Ⅱ地区　SP2240）（第130図）

Ⅱ－10区西端部，r14グリッドに位置し，西は側溝に切られる。検出部分の長径28cm 深度20cm を測る楕円形の小穴。遺物は弥生土器壺・甕が出土。284は甕。口縁端部にはヘラ先で刻目を加え，体部上位にタテハケのち横位のヘラ描き平行沈線を施文する。胎土に泥岩・チャートを含む。

小穴242号（Ⅱ地区　SP2242）（第131図）

Ⅱ－10区西端部，q14グリッドに位置する。径58cm 深度36cm を測る不整円形の小穴。遺物は弥生土器片・壺・甕が出土。285は壺の体部。3条の凸帯を平行して貼り付け，凸帯上は丸い棒状工具により押圧して施文する。胎土に結晶片岩とみられる粒子を含む。286は甕の底部。体部外面にタテハケを施す。胎土に砂岩・泥岩を含む。

小穴261号（Ⅱ地区　SP2261）（第132図）

Ⅱ－5区東部南側，j4グリッドに位置する。径43cm 深度18cm を測る不整円形の小穴。遺物は1点のみで287は砂岩製の叩石。表面と側面に敲打痕を残す。

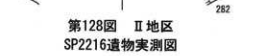
第122図　Ⅱ地区
SP2036遺物実測図

第123図　Ⅱ地区
SP2094遺物実測図

第124図　Ⅱ地区
SP2115遺物実測図

第125図　Ⅱ地区
SP2136遺物実測図

第128図　Ⅱ地区
SP2216遺物実測図



第130図　Ⅱ地区
SP2240遺物実測図

第131図　Ⅱ地区 SP2242遺物実測図

283 0 3cm
その他の遺物 0 10cm

第127図　Ⅱ地区
SP2210遺物実測図

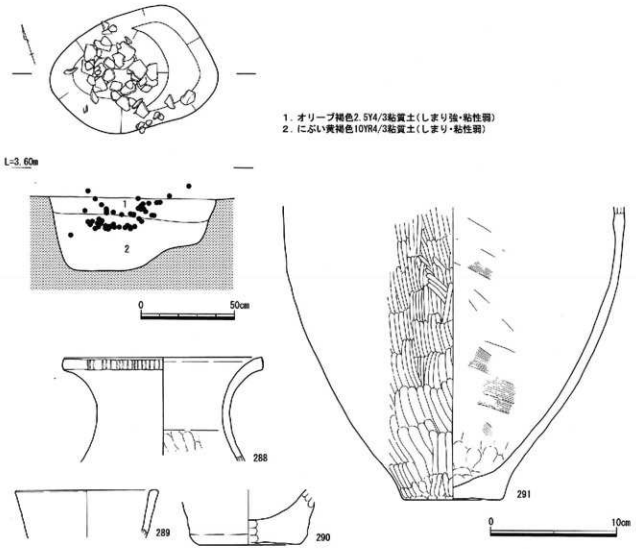
第126図　Ⅱ地区
SP2174遺物実測図

第129図　Ⅱ地区
SP2230遺物実測図

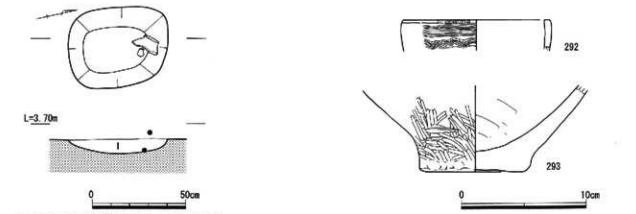
第132図　Ⅱ地区
SP2261遺物実測図

小穴225号（Ⅱ地区　SP2225）（第133図）

Ⅱ－８区西部北端，ｐ９グリッドに位置する。径89㎝深度38㎝を測る不整形の小穴。断面は不整な逆台形状で，埋土は２層である。遺物は弥生土器壺・甕が出土。288は広口壺。口縁端部にヘラ先による刻目を加える。胎土に結晶片岩を含む。289は直口壺の口縁部。胎土は粗い。290は壺とみられる土器の底部。胎土は粗く，泥岩とみられる粒子を含む。291は甕。体部外面には幅広で短い縦位のヘラミ



第133図　Ⅱ地区 SP2225遺構・遺物実測図



第134図　Ⅱ地区 SP2245遺構・遺物実測図

ガキ，内面には板ナデまたはハケ調整を施す。胎土に結晶片岩を含む。

小穴245号（Ⅱ地区　SP2245）（第134図）

Ⅱ－10区西部南端，q・r 15グリッドに位置する。径52cm 深度8cm を測る不整形の小穴。断面は浅い皿状で，埋土は1層である。遺物は弥生土器壺・鉢が出土。292は直口壺の口縁部。口縁端部に細かい刻目を加える。外面には櫛描直線文と波状文を施文する。胎土に金雲母を含む。293は広口壺の底部。体部外面に丁寧なヘラミガキを施す。胎土は粗く，砂岩・チャートを含む。

〈Ⅰ地区　第2包含層出土遺物〉（第135図）

Ⅰ地区においても少量ながら弥生時代の遺物が，確認トレンチや側溝等で出土している。遺構は全く検出されていない。

294・295は広口壺の口縁部。ともに胎土は精良で，結晶片岩を含む。296は甕。口縁端部に浅い沈線を1条引き，上下に刻目を加える。胎土に結晶片岩を含む。

297～299はサヌカイト製の打製石鏃。297は凹基式，298・299は凸基有茎式である。298は柳葉形の身部に浅い抉りを加え茎を作り出す。299は二等辺三角形の身部をもつ。300・301は砂岩製の叩石。300は端部と表裏両面，側縁の一部に敲打痕が集中。301は礫の片方の端部と表面の一部を使用。

〈Ⅱ－1～6区　第2包含層出土遺物〉（第136～140図）

302・303は広口壺。302は外面の頸部から体部上位にタテハケのち横位の櫛描直線文を連続させ，その下に櫛描波状文を描く。のち部分的に縦位の櫛描直線文を施す。303は頸部外面に横位の平行沈線を16条引く。胎土に泥岩・チャートを含む。304は細頸壺と考えられる。体部下位に横位のヘラミガキを施す。胎土に結晶片岩を含む。

305～309は逆L字形の口縁をもつ甕。口縁端部にヘラ先で刻目を加える。体部上位にヘラ描き平行沈線を2～6条施文する。308は胎土に金雲母とみられる微細な鉱物を含む。

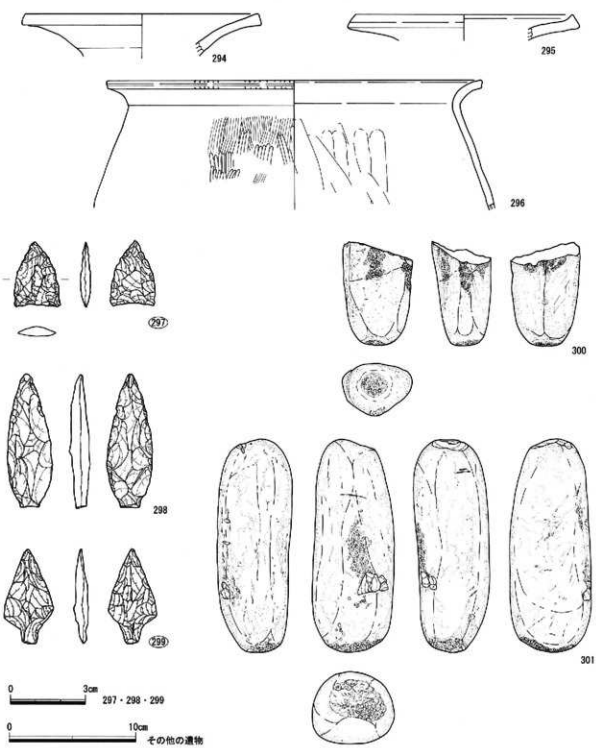
310・311はくの字に屈曲する頸部をもつ甕。体部外面上位にヘラ描きの平行沈線を施し，310は沈線の下に不規則な楕円形の刺突文を3列施文。310の胎土に金雲母・チャート・泥岩を含む。

312～320は外反する口縁をもつ甕。320を除き器面調整にハケを用いる。312～316は口縁端部に刻目を施す。313は体部上位にヘラ描き沈線を引く。317は口縁端部の形状は逆L字形に近似する。胎土は，313にチャートとみられる粒子，314に結晶片岩，316に結晶片岩・絹雲母，317に金雲母か・角閃石とみられる黒色粒子，318に金雲母・チャート・泥岩を含む。320は頸部が強く屈曲し，口縁が外方に水平に延びる。口縁端部を上方に拡張する。

321は甕の体部片。ヘラ描平行線文の間にヘラで2条一単位の鋸歯状文様を描く。322～326は甕の底部。外面にタテハケを施す。胎土は，322に結晶片岩，323にチャート，324に石灰岩とみられる粒子・チャート・泥岩，326に泥岩を含む。

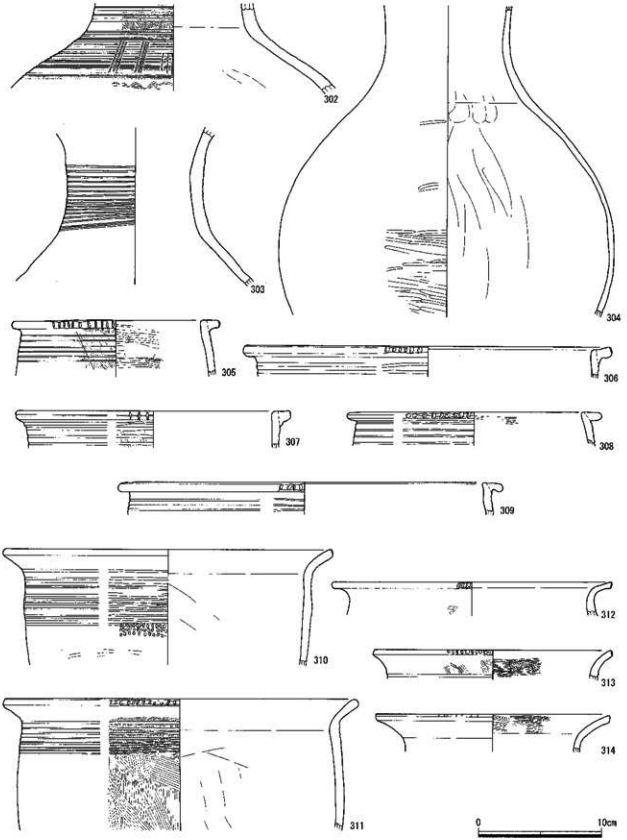
327～331は壺の底部とみられ，327～329は外面にヘラミガキ調整を施す。胎土は，327に結晶片岩，328・329にチャート，330に在地花崗岩，331に金雲母・石灰岩，を含む。

332～335は紀伊型甕の底部。体部外面にヘラケズリを施す。体底部の境が外方に突出し，強く括れる。胎土は，332に花崗岩とみられる粒子，333に結晶片岩，334に金雲母・チャートを含む。

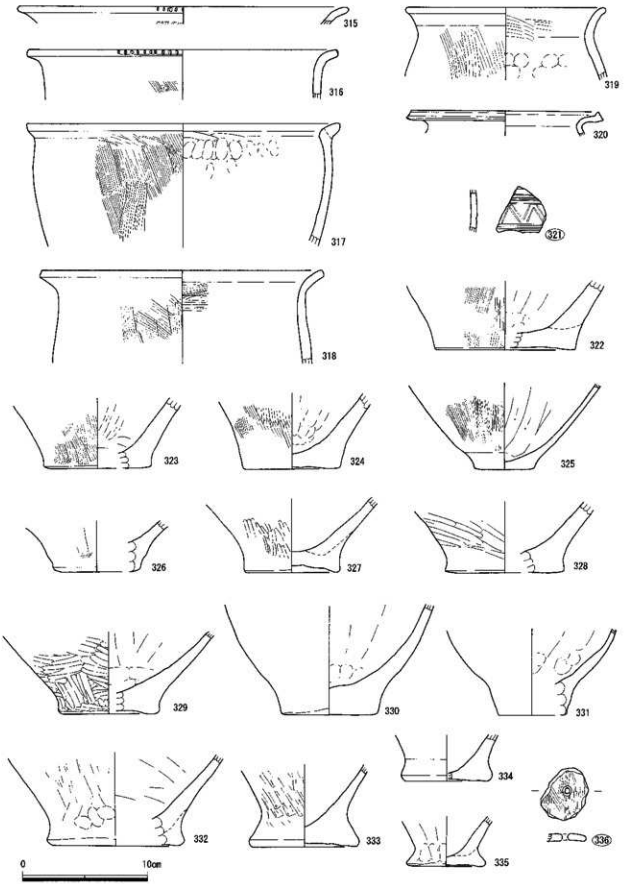


第135図　Ⅰ地区 第２包含層遺物実測図

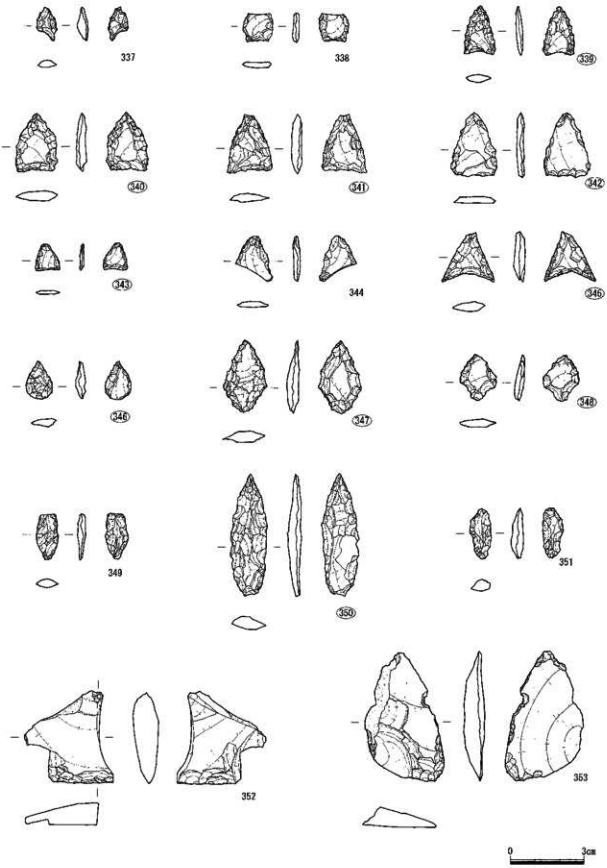
336は土製紡錘車。ハケを施す土器片縁辺部を打ち欠いて円盤状に整形し，中央部に穿孔を施す。337～353はサヌカイト製の石器類。337～350は打製石鏃。337～345は凹基または平基式である。346～350は凸基式で，348・349は有茎式の可能性がある。350は柳葉形で，349は欠損するが柳葉形の可能性がある。351は打製石錐と考えられる。352は打製石包丁の可能性がある。横長剥片の縁辺に両面



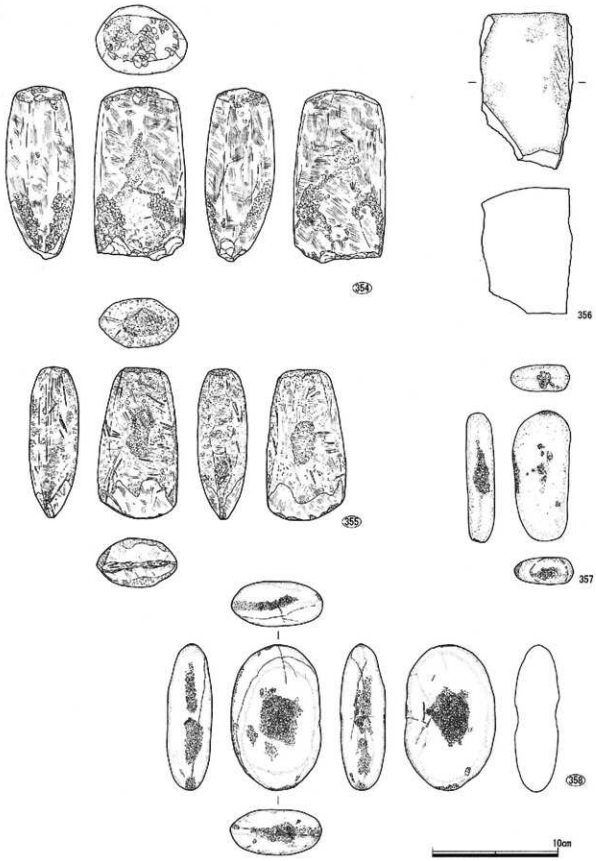
第136図　Ⅱ-1～6区 第２包含層遺物実測図（１）



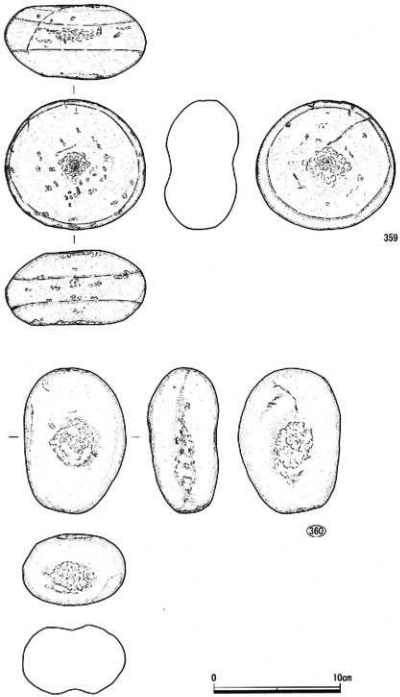
第137図　Ⅱ-1～6区 第２包含層遺物実測図（２）



第138図　Ⅱ-1～6区 第２包含層遺物実測図（３）



第139図　Ⅱ-1～6区 第２包含層遺物実測図（４）



第140図　Ⅱ-1～6区 第２包含層遺物実測図（５）

から調整を加える。353は削器とみられる。縁辺部に両面から簡単な調整を加え刃部を作り出す。

354・355は緑色岩製の磨製石斧で，叩石や凹石に転用している。354は粗い作業に使用されたらしく刃部が完全に潰れ，表裏両面にも激しい敲打の痕跡を残す。355は表裏両面に浅い凹みを残す。

356は砂岩製の台石。357は砂岩製の叩石。両端と側縁の一部に敲打痕が集中。358～360は砂岩製の凹石で，表裏両面の中央部に敲打痕が集中し大きく凹む。また両端と縁辺部にも敲打痕が残る。

〈Ⅱ－7～11区　第2包含層出土遺物〉(第141～144図)

361～365は広口壺の口縁部。361は口縁端部にヘラ先による刻目を施し，頸部外面には横位のヘラ描き平行沈線を7条施文。361の胎土に泥岩とみられる粒子を含む。362は口縁端部に沈線を1条引き，連続する斜位の刻目を施す。内面は櫛描波状文を口縁に沿って施文し，その下には縦位の櫛描直線文を間隔をあけて施文する。胎土にチャート・泥岩を含む。363の口縁内面は三角形の角押文を3列施文し，その下には櫛を使って扇形文を描く。胎土に結晶片岩を含む。364は口縁端部にヘラ先で刻目を施す。胎土に結晶片岩を含む。365は口縁端部を凹線状にくぼませ，刻目を加える。内面は櫛描の波状文を口縁端部に沿って施文し，その下には同じ櫛を使って扇形文を描く。胎土に泥岩を含む。

366は壺で，長い筒状の頸部をもつ。口縁端部には縦位の刻目を加える。口縁内面に沿って櫛描波状文を施し，その下には縦位の櫛描直線文を間隔をあけて施文する。胎土に結晶片岩を含む。

367・368も広口壺の口縁部であるが，口縁・頸部とも短く上方への開きも小さい。367の胎土は粗く，砂岩・泥岩を含む。368の胎土に泥岩を含む。369・370は広口壺の頸部。外面にヘラ描きの平行沈線を施文する。胎土は，369に砂岩・泥岩，370に結晶片岩を含む。

371～381は壺または広口壺の頸部や体部で，櫛描の波状文や平行線文を描くものが主体である。371～374・380は外面に櫛描波状文と直線文を施文する。378は波状文と直線文に加えて流水文を，379は直線文と簾状文を描く。375は体部上位で，ヘラ描きの平行沈線を2条施文する。376・378は低い凸帯を貼り付け，上からヘラ先で縦位または斜位の刻目を加える。381は壺の下半で，外面に縦位のヘラミガキを施す。胎土は，371・372・374・379・381に結晶片岩，373に結晶片岩・絹雲母，376に砂岩，377にチャートとみられる粒子を含む。

382・383は逆L字形の口縁をもつ甕。口縁端部に刻目を加え，体部上位にヘラ描きの平行沈線をそれぞれ5条と6条施文する。383は胎土に砂岩・泥岩を含む。

384～394は外反する口縁をもつ甕。外面はハケ調整のみの個体が多い。384・385・389・390は口縁端部に刻目を加える。384・388は体部上位に横位のヘラ描き平行沈線をそれぞれ4条と5条施文。胎土は384に泥岩とみられる粒子，385・388に砂岩，386・387・391・392・394に結晶片岩，390に金雲母・泥岩とみられる粒子，393にチャートを含む。

395・396の甕は口縁部を欠く。体部上位にハケのちヘラ描き平行沈線を施文する。胎土は395に絹雲母・泥岩，396に砂岩を含む。

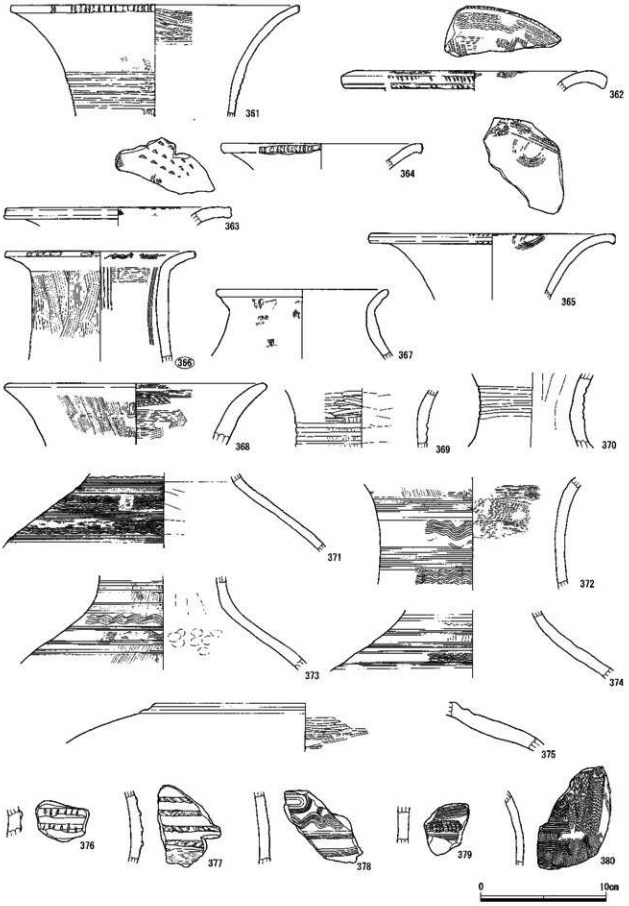
397・398は甕または甕の体部と考えられる。外面に間隔をあけて施文したヘラ描き平行沈線の間に半截竹管で鋸歯状の文様を描く。ともに砂岩およびチャートとみられる粒子を含む。

399～410は壺または甕の底部。402～404は壺と考えられる。外面にはヘラミガキを施す。407～410は紀伊型の甕と考えられる。体部外面に粗いヘラケズリを加える。胎土は399・403～408・410に結晶片岩，401・402・409に結晶片岩・泥岩，を含む。

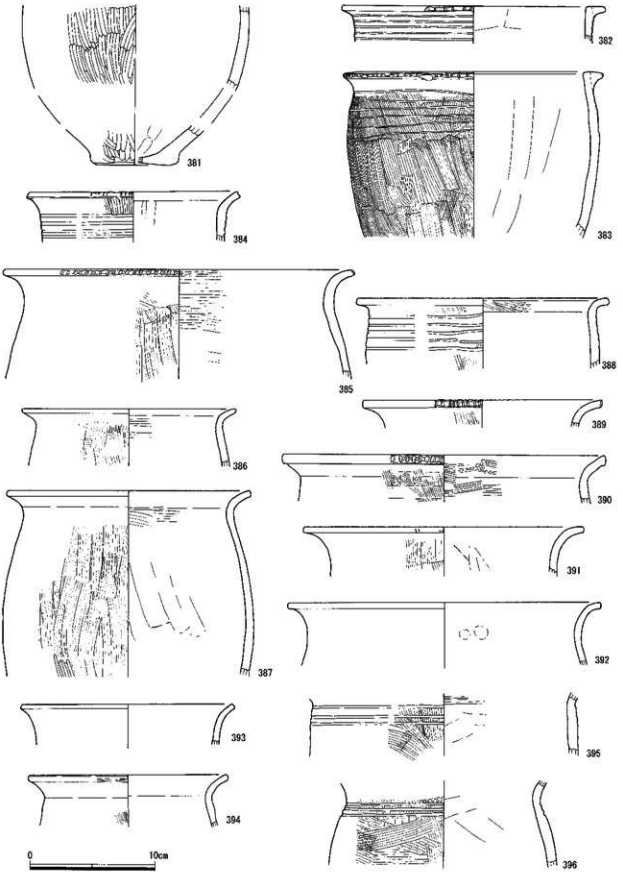
411は鉢。内外の全面にヘラミガキを施し，口縁内面にヘラ先で縦位の刻目を加える。胎土に結晶片岩・絹雲母を含む。412も鉢と考えられる土器。胎土に結晶片岩を含む。

413～417は紡錘車。土器片の縁辺部を打ち欠いて円盤状に成形し，中央部に穿孔を加える。一部は打ち欠きのち研削整形する。413と415は表面に櫛描の直線文と波状文を残す。いずれも胎土に結晶片岩を含み，414は絹雲母を含む。

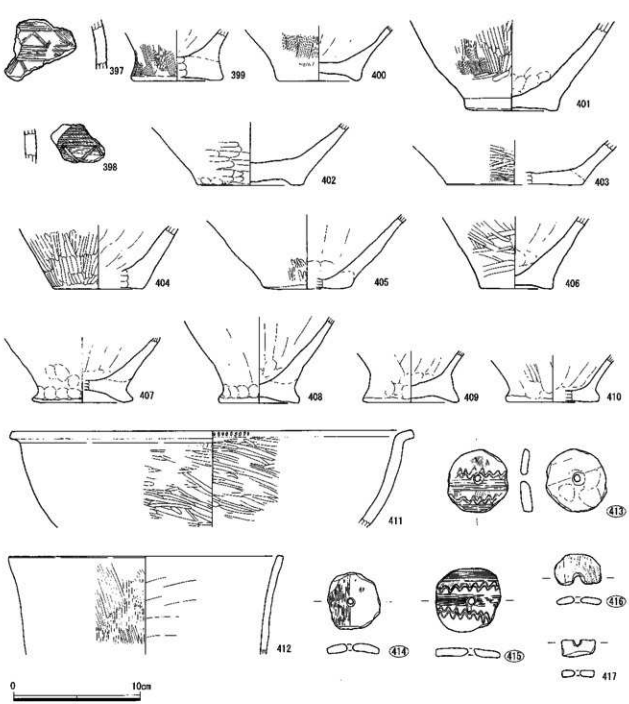
418～424はサヌカイト製の石器類。418・419は平基式の打製石鏃。420は凸基式で左右非対称の形



第141図　Ⅱ-7～11区 第２包含層遺物実測図（１）



第142図　Ⅱ-7～11区 第２包含層遺物実測図（２）

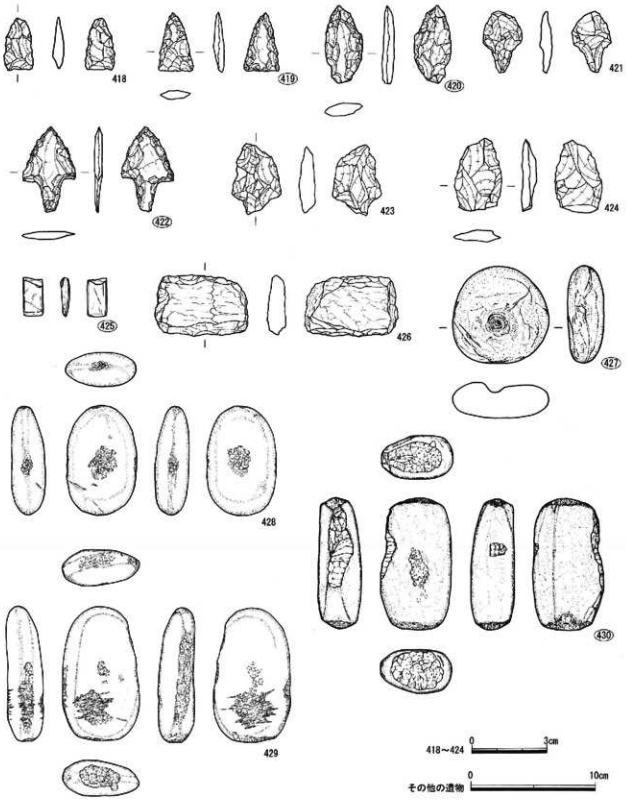


第143図　Ⅱ-7～11区 第２包含層遺物実測図（３）

態をもつ。421～423は凸基有茎式で茎部分を明瞭に作り出す。424は石鏃の未製品と考えられる。

425は結晶片岩製の小型扁平片刃石斧。全面に入念な研磨を加え断面を方形に仕上げる。426は結晶片岩製の用途不明石器。板状に加工した片岩の側縁に両面から調整を加え方形に整えている。石庖丁あるいは頭部と刃部を欠いた打製石斧の可能性がある。

427は砂岩製の凹石。428～430は砂岩製の叩石。428は表裏両面と両側縁の中央部付近にそれぞれ敲打痕が集中する。429は他の敲石とは異なり表裏両面と側縁部の敲打痕が鼠喰状を呈していることから，石器製作の際のハンマーに使用されたと考えられる。430は両端と一方の側縁に敲打が集中し，両端は



第144図　Ⅱ-7～11区 第２包含層遺物実測図（４）

平らに潰れ，側縁は大きく抉る。

【3】古代・中世の遺構と遺物

〈Ⅰ地区　第1遺構面〉(第145・146図)

Ⅰ地区は調査地西半部，東西長約180m南北幅約60mの範囲で調査を行った。遺構面は1面のみで古代～中世の遺構を検出した。遺構数は，竪穴住居（SB）1棟，掘立柱建物（SA）73棟，棚列（SG）20基，土坑（SK）552基，溝（SD）56条，不明遺構（SX）14基，小穴（SP）2499基に上る。

竪穴住居1号（Ⅰ地区　SB1001）(第147～153図)

Ⅰ－7区中央部南側，j～l19～1グリッドに位置する。南北654cm 東西592cm 深さ26cmを測る方形の竪穴住居。南西と北東の角は緩やかにカーブする。主軸はN23°Wを向く。断面は逆台形状で，東側に幅約60cmの段を有する。埋土は3層に分層できる。

北壁中央部に竈EH1を設け，煙道を北に伸ばす。柱穴は6基検出し，2基の遺構内土坑を有する。

竈EH1は，全長165cm，袖部長さ107cm 幅122cm 残存高35cm，焚口部幅48cm，煙道部長さ58cm 幅38cm 深度8cm，竈下部構造幅223cm 奥行き155cm 深度17cmを測る。燃焼部南西寄りに高さ32cmの砂岩支柱石を設置する。土層は15層に分けられる。EH1の上部を覆う1・2層は，住居の廃土である。3～7層は燃焼部の埋土である。3～5層はブロックを多く含むことから袖部・天井部の崩落に伴う埋土と考えられる。6・7層は使用時に堆積した燃焼部床面直上の埋土で，焼土や炭化物を多量に含む。8～12層は袖部の構築土である。11・12層の燃焼部側は被熱による赤変がみられる。13層は燃焼部直下に位置し，支柱石設置に伴う上層と考えられる。14・15層は下部構造の埋土である。焚口に近い燃焼部上位からは土師器甕（443）が出土しており，竈に甕を置いた状態で住居の廃絶を迎えたと考えられる。

EK1は住居中央部北寄りに位置する，長軸102cm 短軸86cm 深さ20cmの不整な隅丸方形状の土坑。断面は皿状で，埋土は4層に分層でき，すべての上層で少量の炭化物片と焼土粒を含む。

EK2は住居南端部中央に位置する，長軸146cm 短軸106cm 深さ10cmの長方形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は1層である。底面は平坦で，柱穴や掘り込み等は検出していない。

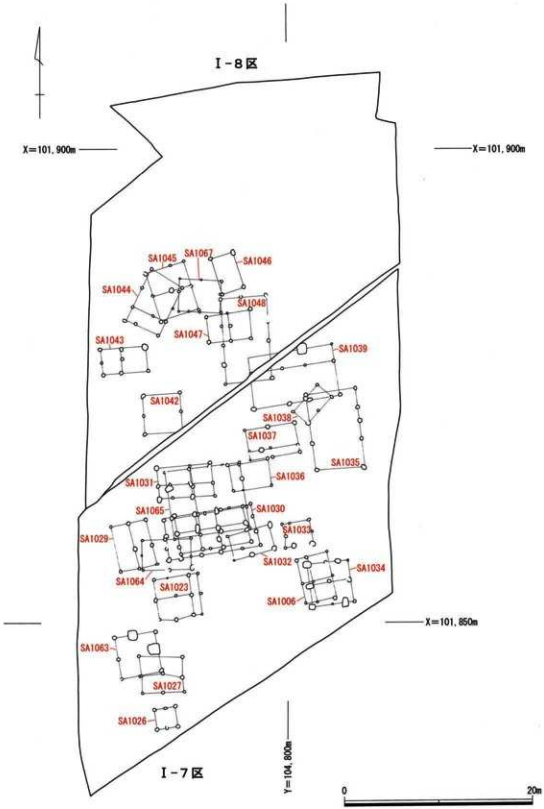
EPは6基検出し，径40～54cm 深度24～70cmを測る。EP1・2・5・6が主柱穴と考えられる。柱痕を示す土層は確認できない。

周壁溝ED1は，住居床面直下で検出した長軸538cm 短軸502cm 深さ20cmを測る溝で，EHやEKに切られた部分を除いて全周する。断面は逆台形状または浅いU字状を呈し，埋土は2層に分層できる。住居の下部構造と考えられる。

遺物は弥生土器片・甕・鉢，土師器片・甑・椀，須恵器片・蓋・杯・高杯・甕，土師質土器片，瓦器椀，瓦質土器杯か，鉄製品片・釘，鉄滓，羽口，溶解炉壁，砂岩製叩石，被熱砂岩礫（竈支柱石），結晶片岩製不明品，炭化物片が出土。竈内部と土部，竈の東西，および住居中央付近に多くみられる。床面直上に少なく，埋土第2層に集中する。

432～442・450は須恵器で，蓋杯・高杯・甕がある。蓋杯のうち，杯（435～441）は口径12cm 前後と小型で，受け部からの立ち上がりは内傾していて短い。杯部そのものは深さがさまざまで，扁平なものほど底部は平坦面をもつ。外面底部の回転ヘラケズリが全くなく台から切り離したままのもの

第145図　Ⅰ地区 第１遺構面　遺構配置図



第146図　I-7・8区 第1遺構面 SA配置図

(438・440) か，1周程度 (437) か，多くて2周 (435・436) と省略傾向である。

一方，蓋 (432～434) は口径が小さく杯に合うサイズではない。天井部が丸く深い器形であることを考えれば，立ち上がりをもたない441と同様に杯に含めて良いかもしれない。

442は高杯。杯部を失っているが，無蓋の短脚である。高杯の脚部のいっそうの短脚化の所産で，脚端付近はほぼ水平となり，端部で上下に拡張させるもの。

450は甕。口頸部を欠くものの，体部中位に最大径がくるものと考えられる。底部内面に付着した自然釉が径15～18cm のドーナツ状を呈する。この釉は頸部内面の器壁沿いに垂れ落ちたものであり，正立状態での焼成を示すと共に頸部径のおおよその法量が推定できる。整形は，外面擬格子タタキのち回転カキメ，内面同心円当具によるもので，内面底部にもっとも新しい段階の当具痕があり，カキメも密であることから，自重による歪みを解消するために最終工程で倒立して整形している。なお，同心円当具の原体は径9cm 以上，内周の溝内に車輪のスポーク風に放射状に浮き彫りのある「車輪文形同心円状当具」である。体部外面中位には，別個体の破片が溶着している。この破片の本来の内面に同心円当具痕があり，器壁厚が約6㎜であることから，450と同規模の甕類が隣接して焼成されていたとみられる。これら須恵器の焼成にはバラツキが多く，437は土師器と同等な軟質で，器表面にみえる混入物が非常に多い。焼成時点での還元が良好ではないが，住居内では機能を十分に果たしている。

431・443～449は土師器で，供膳具と煮炊具がある。供膳具には鉢，煮炊具には，甕・鍋・甑がある。

供膳具のうち鉢431は半球形の器形をもち，底面の粘土板に粘土を巻き上げながら成形するもので，体部外面下半に成形時のユビオサエが遺る。二次的な被熱により外面の器壁が薄く剥落している。

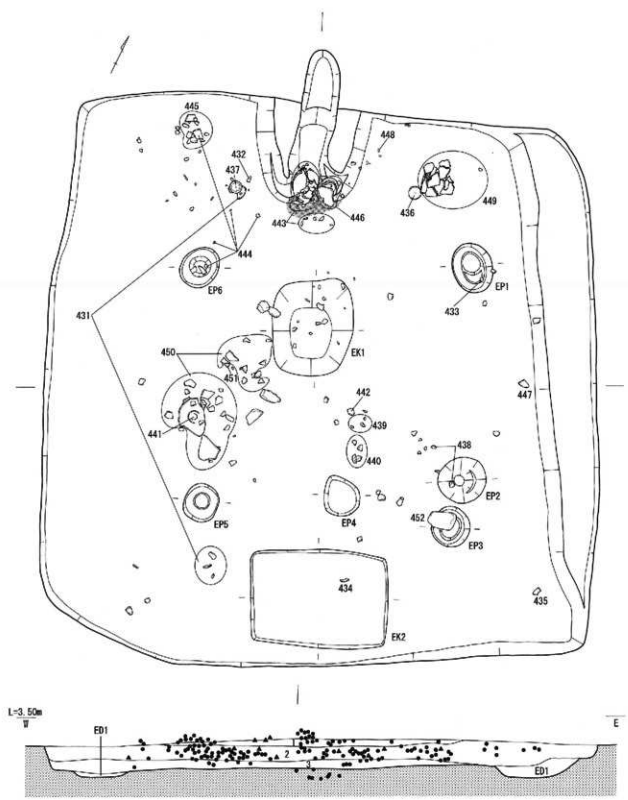
甕には，大型で長胴化しているもの（田川分類：甕C－1類 443・446），大型で球形の体部をもつもの（同：B－2類 445）小型で球形の体部をもつもの（同：D－2類 444）がある。ほぼ完形に復元できた443は体部中位に最大径をもち器高が35cm を超える長胴の甕。体部外面タテハケ，同内面ユビオサエ・ナデによる整形であるが，器表には粘土帯接合時の凹凸が残る。外部底面には煤が付着しているのが観察できるが，中心の部分の径5cm には煤がなく，竈に載せた際の支脚の接していた部分である。446も体部のほとんどを失っているが，長胴の器形が推定できる。口縁部をヨコナデで丁寧に整形している。体部は外面と比較して内面が摩耗しており，被熱の状況を示している。445は体部外面タテハケ，同内面板ナデにより，器壁を薄く整形している。外面全体にわずかに煤の付着が観察される。444は頸部のくびれが弱い器形に特徴がある。体部内面の狭い空間での作業を反映して縦横のヘラケズリは粗い。接合・図化されなかった破片から，底部は器壁が厚く，平坦面をもつ器形になるとみられる。

鍋には浅い器形で口縁部がさらに外反して開くもの（447・448）がある。ともに体部外面をタテハケで，同内面をヘラケズリで，口縁部内外面をヨコナデで整形している。

449は甑。筒形の体部に，体部中位の対面の位置に舌状の把手が付くもの（同：甑A類）。底面には桟で区切られた円孔が穿たれるが，孔の数は4ヵ所程度。体部最下位には2個1対の穿孔があり，調整時にヒモで吊り下げていたことが推定できる。内面の器壁には粘土の接合の痕跡を明瞭にとどめ，4～5cm の粘土帯を上から見て反時計回りに継いで成形した様子が窺える。器表は外面タテハケ，内面は下半を中心にヘラケズリで整形する。煮炊具は全般に胎土への混入物が多く，また個体によっては5㎜を超える石英の粒子が器表に見える。

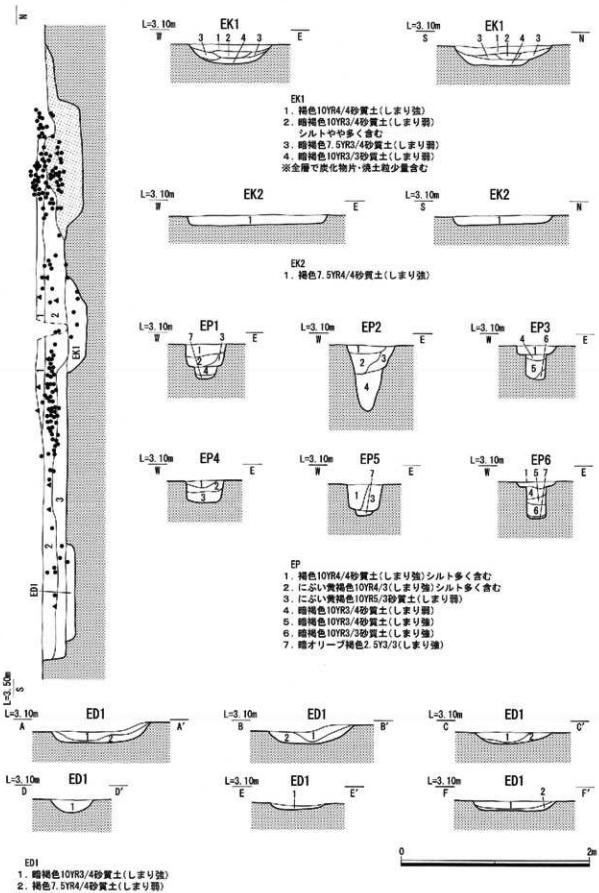
451は鞴の羽口で，炉への装着部分は高熱を受けて，気泡が目立つ様の状態となっている。

これらの土器の年代は，須恵器をみるかぎりTK209型式～TK217型式にまたがっていると考えられ



覆土
1．褐色10YR4/6砂質土(しまり弱)シルト多く含む
2．暗褐色10YR3/4砂質土(しまり弱)
シルト多く含む,炭化物片少量含む
3．褐色10YR4/4砂質土(しまり強)シルト多く含む

第147図　Ⅰ地区SB1001遺構実測図（1）



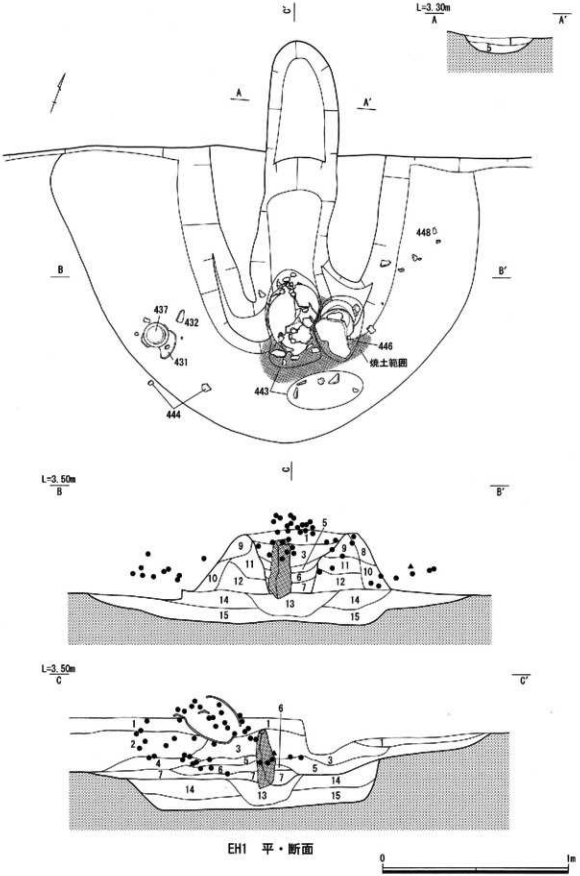
EK1
1．褐色10YR4/4砂質土（しまり強）
2．暗褐色10YR3/4砂質土（しまり弱）
シルトやや多く含む
3．暗褐色7.5YR3/4砂質土（しまり弱）
4．暗褐色10YR3/3砂質土（しまり弱）
※全層で炭化物片・焼土粒少量含む

EK2
1．褐色7.5YR4/4砂質土（しまり強）

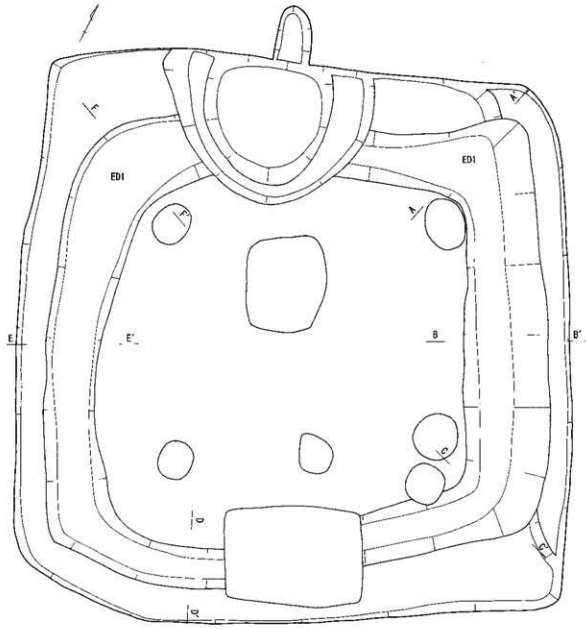
EP
1．褐色10YR4/4砂質土（しまり強）シルト多く含む
2．にぶい黄褐色10YR4/3（しまり強）シルト多く含む
3．にぶい黄褐色10YR5/3砂質土（しまり弱）
4．暗褐色10YR3/4砂質土（しまり弱）
5．暗褐色10YR3/4砂質土（しまり強）
6．暗褐色10YR3/3砂質土（しまり強）
7．暗オリーブ褐色2.5Y3/3（しまり強）

ED1
1．暗褐色10YR3/4砂質土（しまり強）
2．褐色7.5YR4/4砂質土（しまり弱）

第148図　Ⅰ地区 SB1001遺構実測図（２）



第149図　Ⅰ地区 SB1001遺構実測図（3）

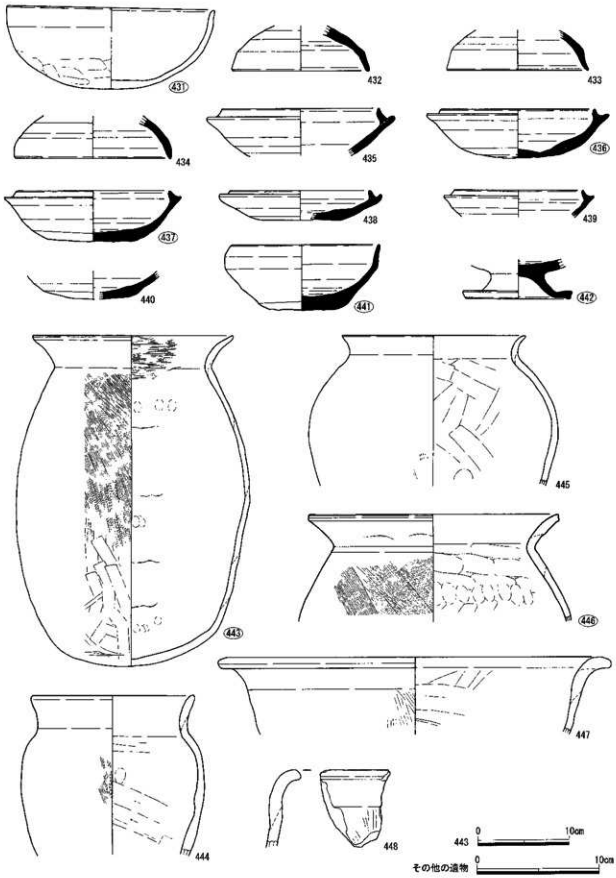


SB1001　下部構造平面

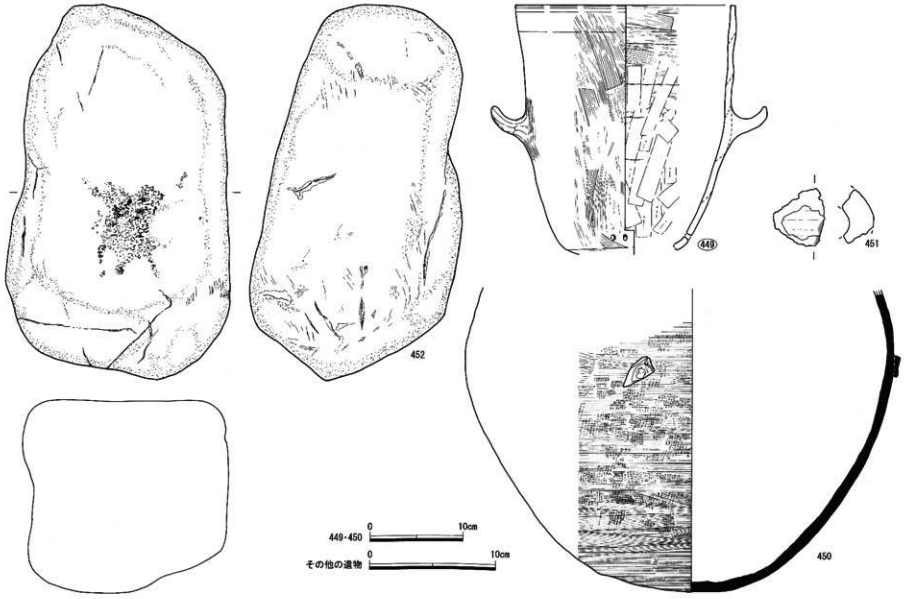
0　2m

SB1001　EH1
1・2は覆土の1・2と同じ
3．暗灰黄色2.5Y5/2砂質土(しまり弱)
4．暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり弱)
5．暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり弱)焼土ブロック・炭化物片含む
6．黒褐色2.5Y3/2砂質土(しまり弱)焼土ブロック・炭化物片多く含む
7．黒褐色10YR3/2砂質土(しまり非常に強)焼土粒・炭化物片多く含む
8．黄灰色2.5Y4/1砂質土(しまり強)黄褐色砂質土ブロック含む
9．黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)暗灰黄色砂質土ブロック含む
10．暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)黄褐色砂質土ブロック含む
11．灰黄色2.5Y6/2砂質土(しまり強)暗灰黄色砂質土ブロック含む
12．オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)灰黄色砂質土ブロック含む
13．灰黄褐色10YR4/2砂質土(しまり強)焼土粒・炭化物片わずかに含む
14．にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり強)黄褐色砂質土ブロック含む
15．暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)シルトやや多く含む

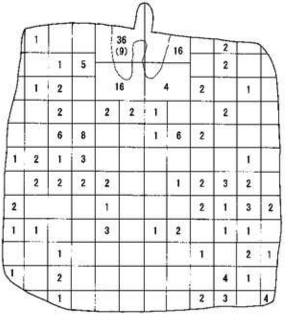
第150図　Ⅰ地区 SB1001遺構実測図（４）

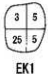


第151図　Ⅰ地区 SB1001遺物実測図（1）



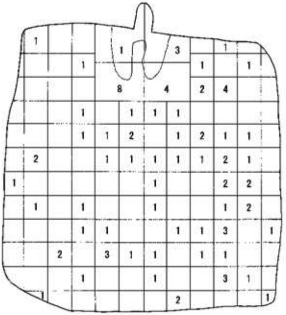
第152図　Ⅰ地区 SB1001遺物実測図（2）

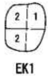




図中の数字は出土点数、（　）は棒状切片

粒状滓の分布





図中の数字は出土点数

鍛造剥片の分布

第153図　I 地区 SB1001出土滓分布図

る。ここでは年代幅を広く取って7世紀前半とみておく。

住居中央北寄りで検出した土坑EK1は，埋土に少量の炭化物片と焼土粒を含むこと，輪羽口（451）が1点出土していることから鍛冶炉の疑いがあるが，壁面や底面に被熱痕は確認できない。SB1001全体で出土した最大の滓は長さ約4cmで，きわめて軽質であり，椀形滓などは出土していない。鍛冶に伴う台石の可能性をもつ礫は，覆土2層上位から出土した452の砂岩製台石であるが，被熱痕は確認できない。しかし住居床面を50cmメッシュに区切って土壌を持ち帰り洗浄を行ったところ，少量ながら着磁性のある鍛造剥片・粒状滓とみられる粒子が確認できた。粒状滓の分布は竈周辺・住居北西・住居南西に多い。竈では9点の棒状切片が出土している。長さ約6～9mmで，両端部がやや細る。断面は一辺1～2mmのやや丸みを帯びた方形である。着磁性は強い。これらの遺物から，鍛冶炉や台石などは確認していないものの，本住居跡において鍛冶作業が行われた可能性がきわめて高いと考えられる。

掘立柱建物1号（Ⅰ地区　SA1001）（第154図）

Ⅰ－1区西部中央，c・d4・5グリッドに位置する。東西2間（4.2m）南北3間（6.3m）床面積26.5㎡，11基の柱穴をもつ掘立柱建物で，建物主軸はN10°Wを向く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し，径24～50cm，深度20～44cmを測る。

遺物はEP3～10から土師質土器片・杯（回転糸切り）・皿（回転糸切り），瓦器椀が出土。453～456はEP6の出土遺物である。453は土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。454～456は土師質土器杯。454・455は回転台成形で，455は底部外面に回転糸切り痕を残す。456は非回転台成形とみられ，体部外面下位に指頭圧痕を残す。457はEP7の出土遺物で，土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。458～466はEP10の出土遺物である。458は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。459～466は土師質土器杯で，いずれも体部から口縁にかけて内彎する。459は非回転台成形とみられ，強いヨコナデによって口縁外面と体部の境に明瞭な稜線をつくる。460～466は回転台成形である。460から463は器壁が厚いタイプ，464・465は薄いタイプである。466の底部外面に回転糸切り痕を残す。

遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀を伴うことから，13世紀頃と考えられる。

掘立柱建物2号（Ⅰ地区　SA1002）（第155図）

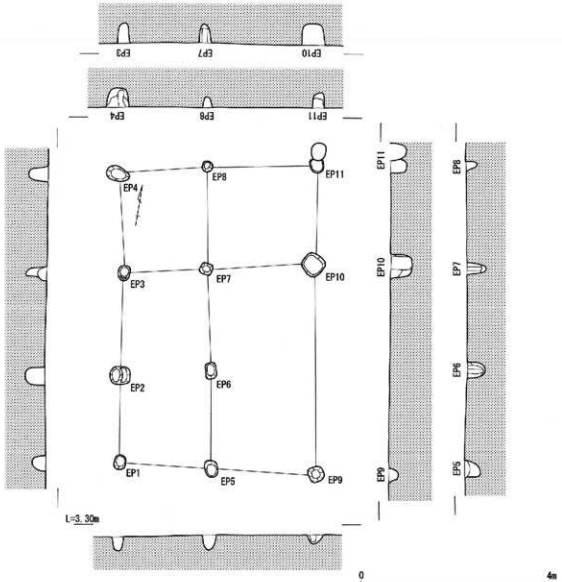
Ⅰ－1区西部南側，b・c4・5グリッドに位置する。東西2間（5.0m）南北2間（3.6m）床面積18.0㎡，7基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN80°Eを向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し，径32～48cm，深度10～54cmを測る。遺物はEP2・3・6から土師質土器片・羽釜，炭化物片が出土。

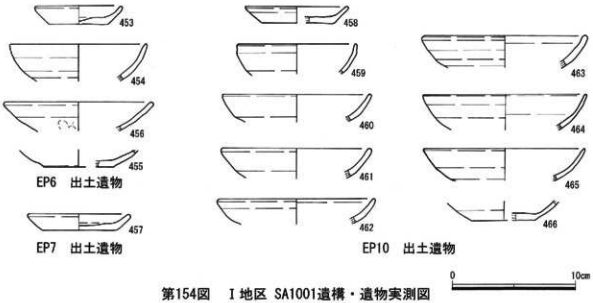
掘立柱建物3号（Ⅰ地区　SA1003）（第156図）

Ⅰ－1区西部北側，d・e4グリッドに位置する。東西2間（3.2m）南北2間（3.7m）床面積11.8㎡，7基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸N10°Wを向く。柱穴は不整円形を呈し，径26～54cm，深度14～36cmを測る。遺物はEP2・3・5から弥生土器片，土師質土器片・杯が出土。

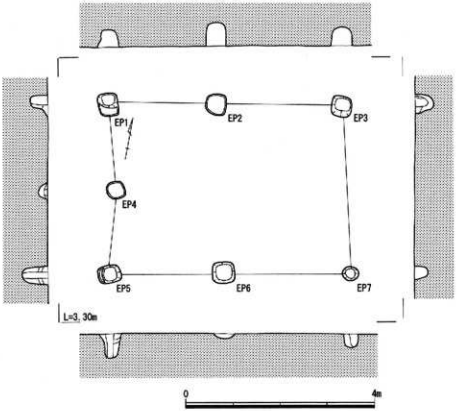
掘立柱建物4号（Ⅰ地区　SA1004）（第157図）

Ⅰ－1区東部中央，c・d6～8グリッドに位置する。東西4間（5.9m）南北2間（3.8m）床面積

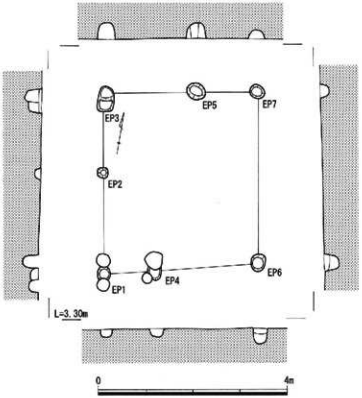




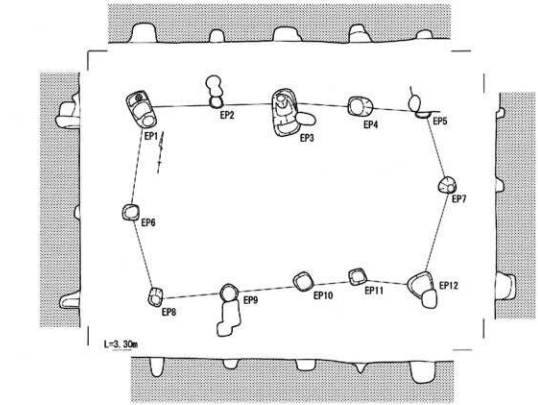
第154図　I地区 SA1001遺構・遺物実測図

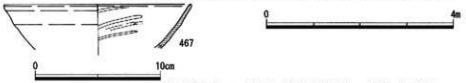


第155図　Ⅰ地区 SA1002遺構実測図



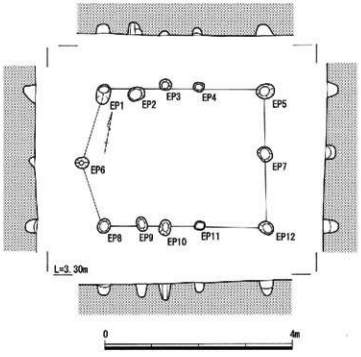
第156図　Ⅰ地区 SA1003遺構実測図





EP2　出土遺物

第157図　Ⅰ地区 SA1004遺構・遺物実測図



第158図　Ⅰ地区 SA1005遺構実測図

22.4㎡，12基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN82°Eを向く。柱穴は隅丸方形または不整円形を呈し，径28～98㎝，深度12～50㎝を測る。

遺物はEP１～５・８～12から須恵器供膳具，土師質土器片・杯（回転糸切りほか）・羽釜・鍋，瓦器椀が出土。467は瓦器椀。体部内面に横位の粗いヘラミガキを施す。器表面は黒色化するが炭素吸着・焼成ともにやや不良である。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

掘立柱建物５号（Ⅰ地区　SA1005）（第158図）

Ⅰ－１区東部中央，c・d８・９グリッドに位置する。東西４間（3.5m）南北２間（2.9m）床面積10.0㎡，12基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN80°Eを向く。柱穴は不整円形を呈し，径20～40㎝，深度10～34㎝を測る。遺物はEP１～３・５・７・９・10・12から須恵器供膳具，土師質土器片・杯（回転糸切り），瓦器椀が出土。遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀を伴うことから，13世紀頃と考えられる。

掘立柱建物６号（Ⅰ地区　SA1006）（第159図）

Ⅰ－１区南部中央，b・c６・７グリッドに位置する。東西２間（3.9m）南北１間（3.4m）床面積13.3㎡，６基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN80°Eを向く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し，径24～32㎝，深度22～48㎝を測る。遺物はEP２・４～６から土師質土器片・杯（回転糸切りほか）が出土。

掘立柱建物59号（Ⅰ地区　SA1059）（第160図）

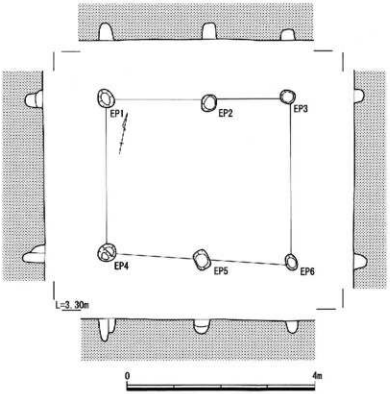
Ⅰ－１区中央部，c・d５・６グリッドに位置する。東西２間（4.6m）南北２間（4.6m）床面積21.2㎡，７基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN12°Wを向く。北西隅の柱穴を欠く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し，径21～48㎝，深度17～26㎝を測る。

遺物はEP１・４・６から土師質土器片・皿（回転糸切り）・羽釜，瓦器椀が出土。468・469はEP４の出土遺物である。468は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。469は瓦器椀。口径13.0㎝を測る。外面の調整は雑で，口縁と体部との境に明瞭な稜線を作り，その部分の器壁は厚い。体部内面は横位の粗いヘラミガキを施す。炭素吸着は不良で灰白色を呈する。和泉型瓦器椀Ⅳ－１～２期に相当し，13世紀中葉～後葉の年代が与えられる。

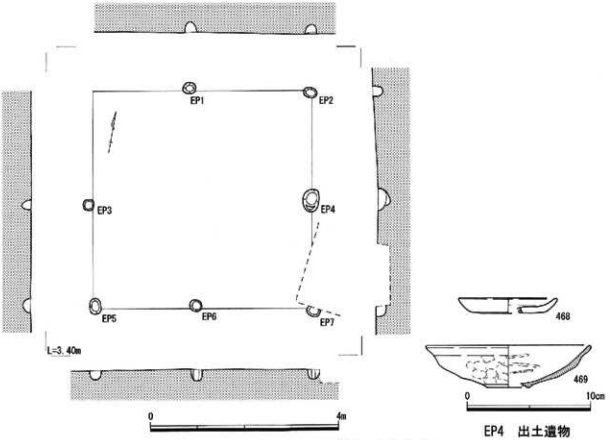
掘立柱建物60号（Ⅰ地区　SA1060）（第161図）

Ⅰ－１区東部中央，c・d６～８グリッドに位置する。東西３間（6.4m）南北２間（3.9m）床面積25.0㎡，９基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN77°Eを向く。柱穴は円形または不整円形・隅丸方形を呈し，径24～56㎝，深度18～48㎝を測る。

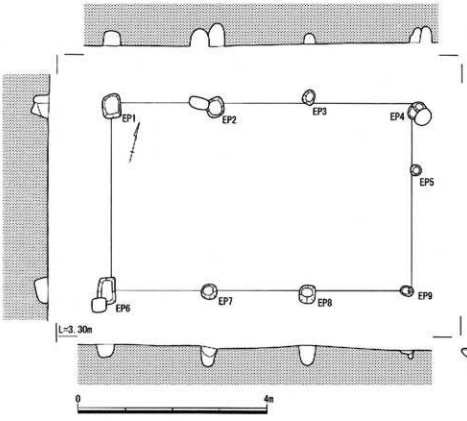
遺物はEP１～３・５～８から土師質土器片・杯（回転糸切りほか）・皿（回転糸切り）・擂鉢，瓦器椀，炭化物片が出土。470・471はEP７の出土遺物である。470は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。471は瓦器椀。口径12.8㎝を測る。体部内面は横位の粗いヘラミガキを施す。炭素吸着は良好であるが，重焼により口縁のみ吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅳ－２期，13世紀後葉とみられる。



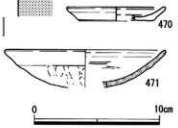
第159図　Ⅰ地区 SA1006遺構実測図



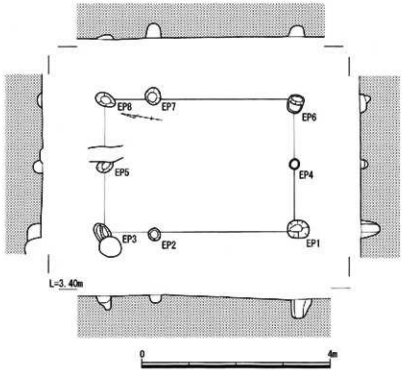
第160図　Ⅰ地区 SA1059遺構・遺物実測図



第161図　Ⅰ地区 SA1060遺構・遺物実測図



EP7　出土遺物



第162図　Ⅰ地区 SA1011遺構実測図

掘立柱建物11号（Ⅰ地区　SA1011）（第162図）

1－1・2区中央部，f・g 5・6グリッドに位置する。東西2間（2.8m）南北2間（4.1m）床面積11.5㎡，8基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN10°Wを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径24～44cm，深度10～41cmを測る。遺物はEP1～7から土師質土器片・杯（回転糸切り）・羽釜・土錘，瓦器椀が出土。遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀を伴うことから，概ね13世紀代と考えられる。

掘立柱建物61号（Ⅰ地区　SA1061）（第163図）

1－1・2区中央部，f・g 6・7グリッドに位置する。東西2間（4.0m）南北2間（3.7m）床面積14.8㎡，8基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN82°Eを向く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し，径28～132cm，深度21～40cmを測る。

遺物はEP1～4・6・8でみられ，土師質土器片・杯（回転糸切り）・皿・鍋，瓦器椀，須恵質上器捏鉢，白磁碗が出土。472・473は土師質土器で，ともにEP4の出土遺物である。472は皿とみられ，口縁は上方に短く屈曲する。非回転台成形で，体部外面に指頭圧痕，体部内面にはヨコハケ状の痕跡がみられる。473は杯で，口縁部は内外面からの強い圧迫により薄く引き出す。遺構の年代は，小片ながら須恵質土器捏鉢や和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀を伴うことから，概ね13世紀代と考えられる。

掘立柱建物7号（Ⅰ地区　SA1007）（第164図）

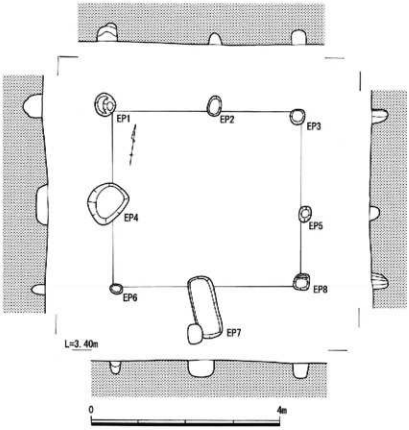
Ⅰ－2区西部北側，h・i 2・3グリッドに位置する。東西3間（7.2m）南北1間（2.9m）床面積20.9㎡，8基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN67°Eを向く。柱穴はの円形または不整円形を呈し，径26～58cm深度7～44cmを測る。遺物はEP1・3・6・7から土師質土器片・椀・杯（回転ヘラ切りか）・皿・鍋，瓦器椀，磁器片（近世か）が出土。遺構の年代は，出土遺物に時期差があり特定は難しい。

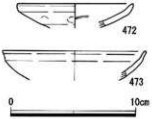
掘立柱建物8号（Ⅰ地区　SA1008）（第165図）

Ⅰ－2区西部北側，h・i 3・4グリッドに位置する。東西2間（3.9m）南北2間（3.7m）床面積14.4㎡，8基の柱穴をもつ掘立柱建物で，建物主軸はN20°Wを向く。柱穴は円形または不整円形・隅丸方形を呈し，径12～45cm，深度14～43cmを測る。

遺物はEP1・2・4・6～8から土師質土器片・椀・杯（回転糸切りほか）・鍋，瓦器椀，鉄製品片が出土。474はEP2の出土遺物で，土師質土器鍋の口縁部。厚い器壁と方形につくる口縁端部をもつ。胎土に金雲母を含むため，瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。古城遺跡などに類例があり，和泉型Ⅲ－1期の瓦器椀と共伴する。古代末に遡る可能もある。

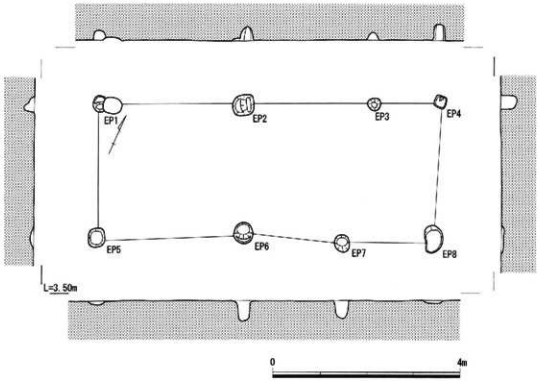
475～480はEP7の出土遺物で，475～478は土師質土器。475は皿としておく。非回転台成形で底部外面はナデ調整する。476は杯としたが椀の可能性もある。器壁は薄い。回転ナデによって体部外面に明瞭な稜がのこる。口縁端部はヨコナデでつくる。477は杯で器壁は厚い。回転台成形で，底部外面は摩耗により調整不明である。478は杯底部で，底部外面に回転糸切り痕を残す。476～478は胎土にチャートとみられる粒子を含む。479は瓦器椀。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し，炭素吸着は良好である。和泉型瓦器椀Ⅳ－1～2期に相当し，13世紀中葉～後葉の年代が与えられる。480は瓦器椀とみられる。体部から口縁部にかけて内彎し，口縁外面のヨコナデは弱い。器壁は極めて薄く，炭素吸着は



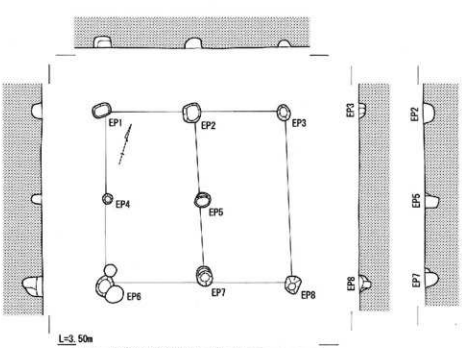


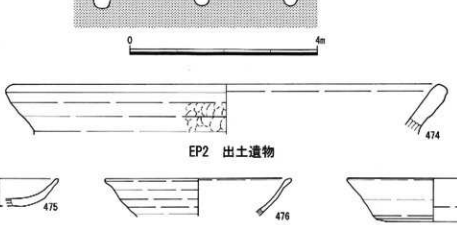
EP4　出土遺物

第163図　Ⅰ地区 SA1061遺構・遺物実測図



第164図　Ⅰ地区 SA1007遺構実測図





第165図　Ⅰ地区 SA1008遺構・遺物実測図

不良である。産地・年代ともに不明である。

掘立柱建物９号（Ⅰ地区　SA1009）（第166図）

Ⅰ－２区西部中央，g・h３・４グリッドに位置する。東西２間（3.8m）南北２間（3.0m）床面積11.4㎡，７基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN66°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径24～38cm，深度14～27cmを測る。EP５で根石を検出している。遺物はEP１～６から土師質土器片・鍋，瓦器椀，鉄製品片が出土。遺構の年代は，13世紀頃とみられる。

掘立柱建物10号（Ⅰ地区　SA1010）（第167図）

Ⅰ－2区中央部，h・i 5グリッドに位置する。東西2間（2.5m）南北4間（4.6m）床面積11.5㎡（庇部含めて東西3間（3.6m）16.6㎡），14基の柱穴をもつ東庇付きの側柱建物で，建物主軸はN11°Wを向く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し，径23～48cm，深度6～39cmを測る。遺物はEP1・2・4・5・8～11・13でみられ，土師質土器片・杯・鍋，黒色土器椀，瓦器椀，青磁碗，鉄滓が出土。遺構の年代は，小片ながら黒色土器椀・瓦器椀・青磁碗が出土することから，12～13世紀代と考えられる。

掘立柱建物12号（Ⅰ地区　SA1012）（第168図）

Ⅰ－2区東部南端，f・g 6・7グリッドに位置する。東西2間（4.8m）南北1間（2.6m）床面積12.5㎡（庇部を含めて南北2間（3.4m）16.3㎡），9基の柱穴をもつ南庇付きの側柱建物で，建物主軸はN80°Eを向く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し，径24～50cm，深度9～34cmを測る。遺物はEP2・4・6～8から土師質土器片・杯（回転糸切り），瓦器椀，焼土ブロックが出土。遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀が出土することから，13世紀頃と考えられる。

掘立柱建物13号（Ⅰ地区　SA1013）（第169図）

Ⅰ－2区東部南側，g・h 7・8グリッドに位置する。東西4間（4.7m）南北1間（3.5m）床面積16.5㎡，10基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN73°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径29～72cm，深度12～66cmを測る。

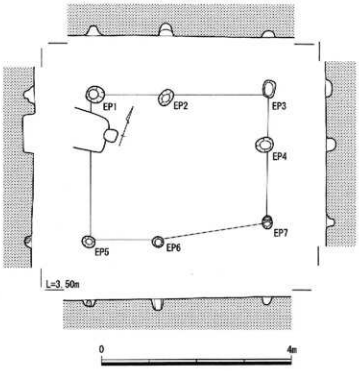
遺物はEP2・4・5・7～10から土師質土器片・杯・羽釜，瓦器椀が出土。481～484はEP4の出土遺物で，瓦器椀。481～483は体部内面に横位の粗いヘラミガキを施す。底部内面は482が平行ヘラミガキ暗文，483は斜格子状または平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成および炭素吸着は481～483がやや不良，484が良好である。いずれも和泉型瓦器椀Ⅲ－3期とみられ，13世紀前葉の年代が与えられる。485～488はEP9の出土遺物である。485は土師質土器杯で，底部外面は回転ヘラ切りのち切り離し痕をナデ消す。486～488は瓦器椀。486・487ともに炭素吸着はみられず，褐色を呈する。二次的な被熱によってカーボンを消失した可能性がある。488は炭素吸着不良である。いずれも摩耗によって内面のヘラミガキが確認できないが，器形や法量から和泉型瓦器椀Ⅲ－3期とみられ，13世紀前葉の年代が与えられる。

掘立柱建物14号（Ⅰ地区　SA1014）（第170図）

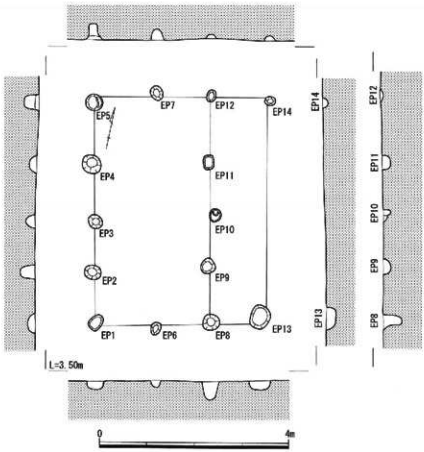
Ⅰ－2区東部南側，g・h 8グリッドに位置する。東西1間（2.0m）南北2間（4.8m）床面積9.6㎡，5基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN18°Wを向く。柱穴は円形を呈し，径22～34cm，深度10～32cmを測る。遺物はEP4・5から土師質土器片，瓦器椀が出土。遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀が出土することから，13世紀頃と考えられる。

掘立柱建物15号（Ⅰ地区　SA1015）（第171図）

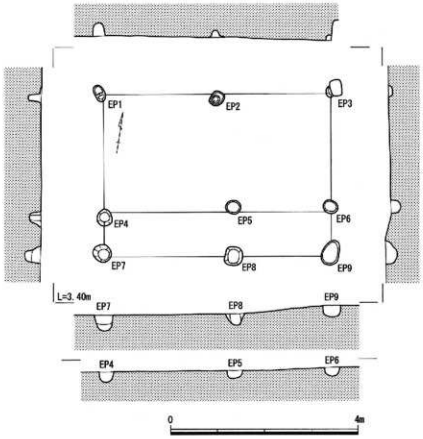
Ⅰ－2区東端部中央，i・j 7・8グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。東西4間以上（4.3m以上）南北3間（3.8m）床面積16.3㎡以上，11基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN70°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径21～36cm，深度6～31cmを測る。遺物はEP1・2・4・5・



第166図　Ⅰ地区 SA1009遺構実測図



第167図　Ⅰ地区 SA1010遺構実測図



第168図　Ⅰ地区 SA1012遺構実測図

8・9・11から土師質土器片・杯（回転糸切りほか）・羽釜・鍋，瓦器椀，鉄釘が出土。遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀が出土することから，13世紀頃と考えられる。

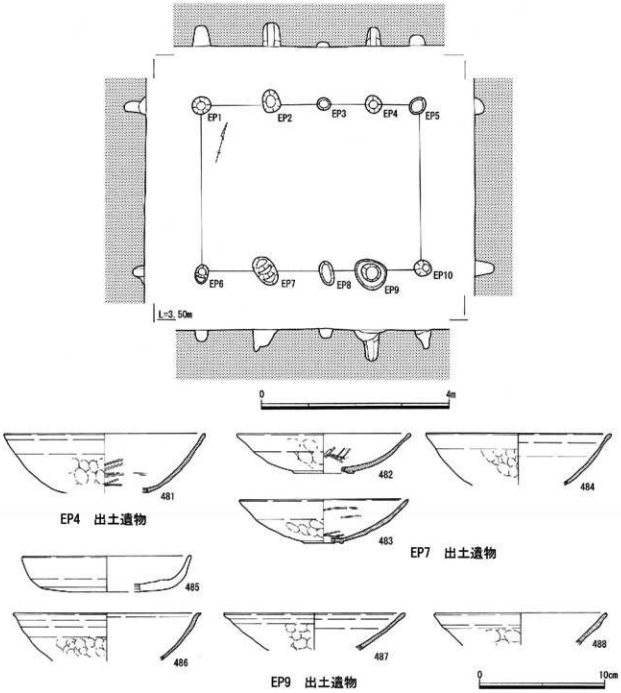
掘立柱建物16号（Ⅰ地区　SA1016）（第172図）

Ⅰ－3区中央部，g・h13・14グリッドに位置する。東西3間（4.4m）南北2間（2.9m）床面積12.5㎡，10基の柱穴をもつ掘立柱建物で，建物主軸はN83°Eを向く。柱穴は円形を呈し，径22～34cm，深度14～56cmを測る。

遺物はEP1～4・6・7から土師質土器片・鍋，瓦器椀，備前陶器片，焼土ブロックが出土。489はEP6の出土遺物で，瓦器椀。口縁外面から体部内面にかけて横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。胎土は酸化炎焼成気味で，炭素吸着は良好である。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期に相当し，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

掘立柱建物17号（Ⅰ地区　SA1017）（第173図）

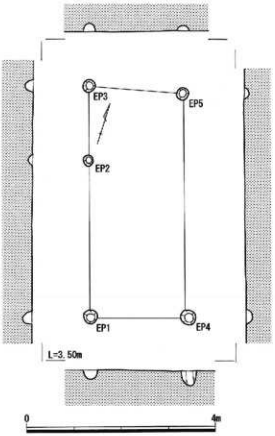
Ⅰ－3区中央部，h・i14グリッドに位置する。東西1間（3.6m）南北1間（2.2m）床面積7.9㎡，4基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN86°Eを向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し，径34～40cm，深度38～53cmを測る。遺物はすべてのEPでみられ，土師質土器片・杯（回転糸切り）・鍋・土錘，瓦器椀が出土。遺構の年代は，小片ながら和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀が出土することから，13世紀頃と考えられる。



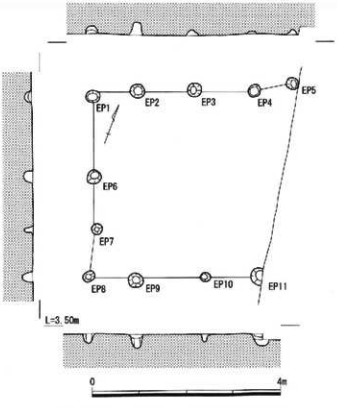
第169図　Ⅰ地区 SA1013遺構・遺物実測図

掘立柱建物18号（Ⅰ地区　SA1018）（第174図）

Ⅰ－４区南部，ｉ・ｊ11・12グリッドに位置する。南東側は調査区外に延びる。東西２間（4.7m）南北２間（3.9m）床面積18.3㎡，５基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN77°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径29～45cm，深度21～34cmを測る。遺物はEP１～４から土師質土器片・杯・鍋が出土。



第170図　Ⅰ地区 SA1014遺構実測図



第171図　Ⅰ地区 SA1015遺構実測図

掘立柱建物19号（Ⅰ地区　SA1019）

（第175図）

Ⅰ－4区南部，i～k11・12グリッドに位置する。南東隅は調査区外に延びる。南東隅は側溝に切られる。東西2間（4.8m）南北1間（3.9m）床面積18.7㎡（庇部含めて南北3間（6.0m）28.8㎡），11基の柱穴をもつ南北庇付きの側柱建物で，建物主軸はN19°Wを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径27～50cm，深度18～45cmを測る。遺物はEP1～3・5～10から土師質土器片・鍋，鉄製品片が出土。

掘立柱建物20号（Ⅰ地区　SA1020）

（第176図）

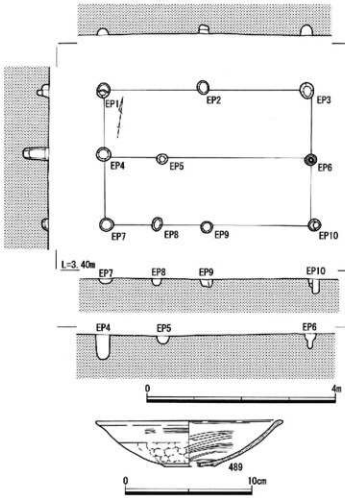
Ⅰ－4区中央部，j・k11・12グリッドに位置する。東西1間（3.2m）南北2間（3.8m）床面積12.2㎡，6基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN8°Wを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径30～36cm，深度19～30cmを測る。

遺物はすべてのEPでみられ，須恵器片，土師質土器片，瓦器椀，滑石製石鍋が出土。490はEP4の出土遺物で，滑石製石鍋。口縁外面と体部外面は縦位のケズリ，鍔部と内面は横位のケズリによって成形する。外面に煤が付着し，とくに鍔部以下は炭化物が厚く固着する。木戸分類Ⅲ－a－2類に相当し，12世紀後半の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後半～13世紀代と考えられる。

掘立柱建物21号（Ⅰ地区　SA1021）

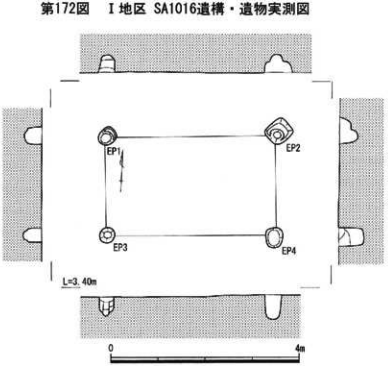
（第177図）

Ⅰ－4区中央部，k・l12グリッドに位置する。東西1間（2.6m）南北2間（3.2m）床面積8.3㎡，6基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN17°Wを向く。柱穴は円形または



EP6　出土遺物

第172図　Ⅰ地区 SA1016遺構・遺物実測図



第173図　Ⅰ地区 SA1017遺構実測図

不整円形を呈し，径12～34cm，深度6～22cmを測る。遺物はEP1・4から土師質土器片が出土。

掘立柱建物22号（Ⅰ地区 SA1022）（第178図）

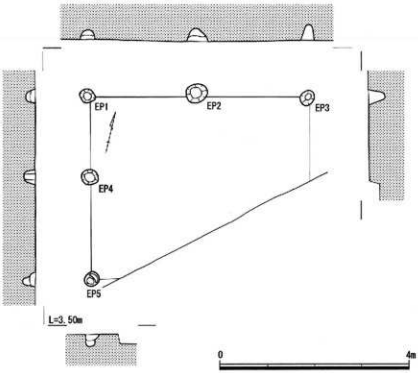
Ⅰ－4区中央部，k・l12・13グリッドに位置する。東西2間（4.9m）南北2間（3.7m）床面積18.1㎡，8基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN78°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径24～31cm，深度6～29cmを測る。出土遺物は皆無である。

掘立柱建物23号（Ⅰ地区 SA1023）（第179図）

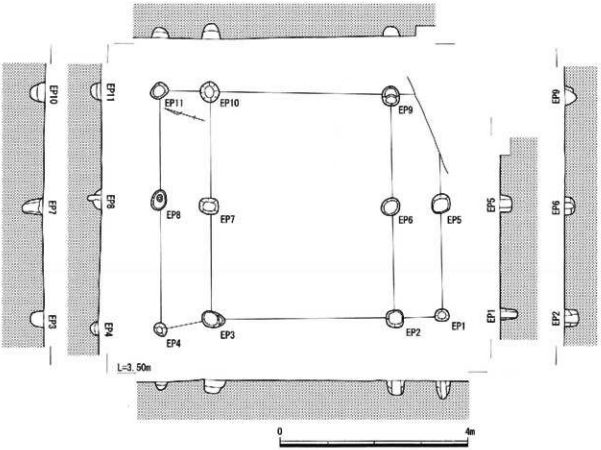
Ⅰ－5区西部，m・n10・11グリッドに位置する。東西3間（3.6m）南北1間（2.4m）床面積8.5㎡（庇部含めて南北2間（3.1m）11.2㎡），9基の柱穴をもつ南庇付きの側柱建物で，建物主軸はN73°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径28～42cm，深度7～22cmを測る。出土遺物は皆無である。

掘立柱建物24号（Ⅰ地区 SA1024）（第180図）

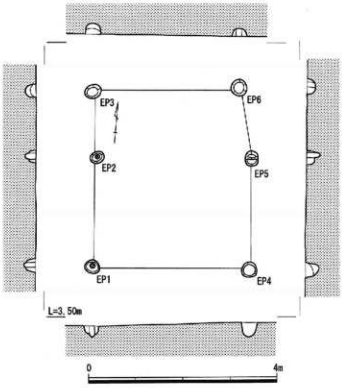
Ⅰ－5区東部，n・o1・2グリッドに位置する。東西1間（2.8m）南北2間（3.9m）床面積10.6㎡，6基の柱穴をもつ側柱建物で，建物主軸はN6°Wを向く。柱穴は円形または不整円形・隅丸方形を呈し，径24～56cm，深度7～44

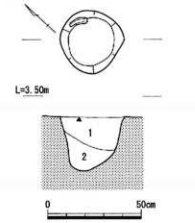


第174図　Ⅰ地区 SA1018遺構実測図

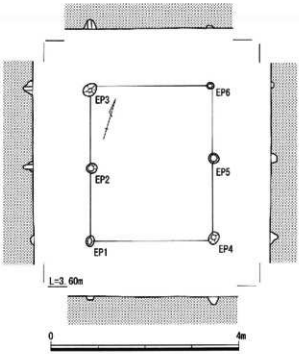


第175図　Ⅰ地区 SA1019遺構実測図

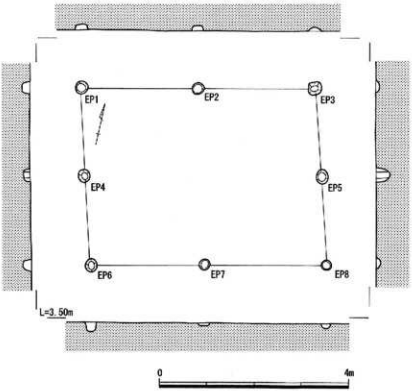




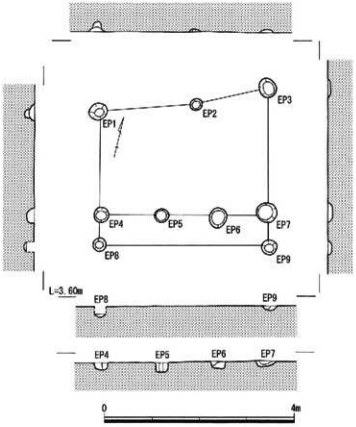
第176図　Ⅰ地区 SA1020遺構・遺物実測図



第177図　Ⅰ地区 SA1021遺構実測図



第178図　Ⅰ地区 SA1022遺構実測図



第179図　Ⅰ地区 SA1023遺構実測図